やさしさの地・能登に育まれた若者たちへ

石井かほり

能登杜氏さんたちの命を懸けた酒造りを追うドキュメンタリー映画『一献の系譜』の撮影のため、酒造りは米作りということで棚田を走り回っていた時のこと。一人のおばあちゃんに呼びかけられました。「ねえちゃん、ほれ、これ水分補給」。そう言って、木から朱く実った柿をもぎ、両手一杯に下さいました。その集落の窓口を通じ、撮影のことは伝えていたので、撮影隊のことを知ってのお気遣いとばかり思っていたら、次の瞬間、「で、あんた誰や？」と。驚きました。何者か判らない＝不審者が自分の敷地に入り込み、何かしているということよりも、炎天下走り回って脱水症状にならないかを先ず心配くださったのです。

東京の渋谷生まれ、神戸育ちの私にとって祖父母の暮らすふるさとの景色は、24時間眠らない大都会。そんな私が能登に降り立ち、そこにふるさと「日本」を感じました。それは、景色や食材の美味しさだけではありません。能登に残る自然環境に育まれる人間性こそが受け継がれるべき日本の宝だと思います。帰る場所が能登であることを誇りに、たくさんの方を招いて、能登に伝わる心の豊かさを分けてあげて欲しいと願っています。

石井かほり（いしい・かおり　映画監督）

聖心女子大学文学部哲学科卒。ドキュメンタリー映画『めぐる』でメジャーデビュー。2011年能登の塩づくりを見つめたドキュメンタリー映画『ひとにぎりの塩』（セブ国際ドキュメンタリー映画祭最優秀撮影賞）を全国公開。現在製作中の能登杜氏の技と魂にせまるドキュメンタリー映画『一献の系譜』は2015年3月公開予定。「呑みトモ」プロジェクトも展開中。http://ikkon-movie.com/

目次

平成26年度 能登の里山里海人「聞き書き」マップ 2

1 農と祭礼

水稲 食べることにこだわったほうがいい 4
村田正明 × 堀下明香・山田香央里（石川県立七尾東雲高等学校２年）

三番叟 受け継ぐ ―三番叟への想い― 9
吉田外喜夫 × 川嶋唯里・見砂佑香（学校法人七尾鵬学園 鵬学園高等学校１年）

能登すいか 人とつくるすいか 14
山上一郎 × 池田千華・森田美悠（石川県立羽咋工業高等学校１年）

虫送り 守られ続ける伝統の灯り ―先人の思いを込めて― 19
角間昭三 × 加治谷梓・岩﨑鼓未（石川県立穴水高等学校２年）

いちじく 美味しいいちじくを食べてもらうために… 24
高崎進 × 安達夏美・猿田桃香（石川県立宝達高等学校２年）

コラム 「能登の里山里海の知恵の伝承」 28
竹田純一（東京農業大学農山村支援センター事務局長）

2 自然の恵みと暮らし

里山保全 米を育てるということ ―環境にやさしい米づくり― 30
北風八紘 × 表ありさ・小杉真美（石川県立飯田高等学校１年）

定置網漁 定置網漁に生きる ―能登の海― 35
中田作助 × 東山瑠花・宮藤莉奈・山下明星（石川県立能登高等学校２年）

赤崎住居 赤崎の街並み ―歴史と文化、自然― 40
本多達郎 × 今江つゆみ・山科佳奈子（石川県立志賀高等学校２年）

コラム 「本物」に触れること。受け継ぐこと。 45
脊戸大樹（全国農業協同組合石川県本部 職員）

3 伝統の技と文化

七尾まだら 里唄 ―七尾まだらを伝承する― 47
長憲二 × 石渡陽子・上野奏笑・岡田紀笑（石川県立七尾高等学校１年）

七尾仏壇 素になれる場所 ―幸せを求めて― 52
布辰巳 × 権左彩夏・西東夏海（石川県立田鶴浜高等学校１年）

アマメハギ 子供たちのために ―アマメハギを続ける― 58
番場政晴 × 河渕理乃・古川真菜（石川県立門前高等学校１年）

＊この作品集は高校生により作られたものです。

平成26年度

能登の里山里海人「聞き書き」マップ

世界農業遺産活用実行委員会では、
「能登の里山里海」を未来へ引き継ぐための取組を行っています。

世界農業遺産「能登の里山里海」ポータルサイト
http://www.pref.ishikawa.jp/satoyama/noto-giahs/

能登の里山里海ポータル　検　索

1 農と祭礼

食べることに こだわったほうがいい

村田　正明

聞き手・堀下明香　山田香央里（石川県立七尾東雲高等学校２年）

名人が住む鉈打地区

自己紹介

名前は村田正明といいます。生年月日は昭和 23 年 4 月 23 日です。66 歳。妻と 2 人暮らし。妻は 65 歳。子供は女の子が 2 人います。長女は金沢に住んでいて、次女は奈良に住んでいます。生まれ育った場所はこの中島です。

鉈打（なたうち）地区とは

鉈打地区には、河内（かわち）・別所（べっしょ）・西谷内（にしやち）・古江（ふるえ）・大平（おおだいら）・鳥越（とりごえ）・町屋（まちや）・藤瀬（ふじのせ）・上畠（うわばたけ）・北免田（きためんでん）の 10 個の集落があります。僕が住んでいるのは、上畠という集落です。上畠は家の数が 19 軒。10 数年前は 24 軒やったんやけど、ここ 10 年でばたばたと減ってしまった。今の人口は 82 人かな。多い時で 130 人。

中島の特産物

中島町の特産物は、中島菜もそうやし、小菊カボチャもそうやし、昔は葉タバコも作っとった。その葉タバコが生産調整で作れんがなって、空いた畑にスイカ作ったし、白菜も作っていた。最近は、ナスを作って白ネギも作っている。今残っているのは、ネギと中島菜と小菊カボチャ。中島菜はもともと自家用のナッパとしてあったもので、大々的に作り出したのは平成に入ってから。昭和 58 年に中島菜を周年栽培できないかということで、いろいろ実験的なことをやった。今は、３年ほど前から、ピーマンも作っている。サラサピーマンっていう生で食べられるピーマンがある。これは結構売れている。今後も増やしていきたいな。これはここら辺しか作っていないな。今は４人のグループで七尾と中島で作っている。そして全部東京に出荷している。

子供の頃の思い出

子供の頃でいうと、ここの集落は昔から農業が熱心なところで各家に黒牛という肉用牛がおった。小学校の頃は、学校から帰ってくるとその黒牛を連れていくのが仕事。そして、山のほうの草を黒牛に食べさせた。連れてった子供達はそこで陣取りやちゃんばらごっこをしたりして遊んで、夕方暗くなると黒牛を連れて家へ戻る。それが子供の頃の家のお手伝いやね。それから、田んぼについては、子供の頃、稲株を、先に刃の付いた竹の棒か木の棒かをクワみたいな要領で真っ二つにポンポンと全部切っていくという手伝いをさせられた。なぜかというと、昔は耕耘機とか今でいうトラクターがないし、クワで全部田んぼを起こす時に株を切っとけば、土が柔らかくほぐれるから株切りという仕事があった。親の真似して田んぼの作業を２月から３月頃にさせられた。子供の頃は、いやでいやでどうして逃げようか、そんなことばっかり考えながらやっていた。

この頃家は 24 軒あって、ほとんどの人は昭和 30 年代まで牛を飼っとった。昭和 40 年代に入って半分くらいになって、最後まで牛を飼っとった人は平成になっても、肉用牛を７頭飼っとったな。その他にその人は酪農を始めて、搾乳牛７頭おって、子牛が４頭から５頭おった。やめて 15 年ぐらい経つと言っていたから、平成 10 年くらいまでやっとった。そのほかに、戦前戦後にかけてこの地域では葉タバコを作っていた。葉タバコというのはタバコの原料。２月頃から種をまいて、そして芽をたてて、その苗をもみがらを詰めた温床で育てて５月に畑に定植する。全部畑に畝をたてたところにずっと植えていく作業。定植した後、７月頃からは高さが１m20cm ぐらいの大きさになる。その葉を下のほうから順番にかいで、ちょうど葉をかく時期があるわけ。この時期を見ながら葉をかいて、その木をほとんど裸にしてしまうぐらい葉っぱを採る。その葉っぱを乾燥所っていって蔵みたいな二間四方の土蔵の蔵に吊っていれて、下から昔は薪だったけど、最後は灯油バーナーで温風を送って葉っぱを乾燥させる。それを決まった行李の中に詰め込んで、そして専売公社に売ってくる。専売公社はそれを工場のほうで葉を出して、カッターみたいに細かくバーッて千切りしたみたいな形にして、タバコに巻くという仕事。

農業を始めたきっかけ

そうやねぇ、農業を始めたのは 35 歳ぐらい。父親が 50 歳代でまだ元気やったから、この人たちがやっとったから横から眺めとった。歳いったらだんだんと「あれせい」、「これせい」と仕事があたって、そのうちに作っとった親たちが

（上）中島の特産物の小菊カボチャ（立体栽培）
（下）中島の特産物の中島菜

１人欠け、２人欠けしてって、上畠に昭和 52 年に営農組合ができて、手伝わんとどんならんなって、まぁこれは避けられんなぁってなって、農業の手伝いしようということで、関わっとったんで、それがきっかけかな。

農業の後継者

私の家としての跡継ぎはいないけど地域としての後継ぎはいる。その青年は高校の時から農業やるって、県立の短大出て、それじゃ物足りないから国立大の農学部出て大学院出て、ほかの所に５年間実習行って今年３月に戻ってきた。それでその人に夢を託している。今のところ１人。組合として戻ってきている人が何人かいるんで、その人たちが将来、鉋打が一つの会社になれば結束してくれるかな。地域として米作りは 30 年くらいもつやろう。

鉦打地区の祭り　　祭りのクライマックス島田くずし

名人にとっての農業と祭りのかかわり

自分でも最近思うことがあるんだけど、農村っていうのは集落のかたまりを大きくなったものとして位置付けてほしい。農業があるから集落がある、集落の人たちは協力するから農業ができるんで、それともう一つ深い関係があるのは祭りだ。伝統的な祭りは農業が一つの土台っていうか、豊穣っていうことを願って祭りを起こしているんで、農業がダメになれば祭りもダメになる。これはね、本当に難しい問題で、農業が維持できないと祭りも集落も維持できないというところかな。集落があるから農業もできて、祭りもできて、祭りがあるから集落があるわけじゃないかな。だから、それがだんだん崩壊されてきているから、これはこれからの農業・集落のあり方っていうのは難しくなるかな。これから日本はどういうふうに変わっていくのか。

祭りというのは、もともと農業の収穫とかいうて五穀豊穣、５つのその穀物の豊穣を願って感謝するのが祭りなんで、日本的な祭りはそこに端を発しとるわけや。だから、農業がなかったらなんも祭りをする必要ないげんて。それこさ、どっかのニュータウンの団地の中のお遊びになるんで。だから、農業がだめになれば祭りもだめになるし、祭りができなくなるということはそこの集落としての機能や維持ができないから祭りができないという意味で、農業と祭りは切っても切れない要件がある。農業も祭りも両方とも大事だよという話をしとった。だんだんとそういう風な形になって、集落のなかでも祭りができない集落もいくつかでてきとるんや。人が高齢化するとか人口が減ってとかというのももちろんやけど、おっても「なんでそんなめんどくさいことせんとだめなん」というような風潮になってくる。そうなってくるんや。そういうのは、１年の間、農業に携わっているとどこかしら五穀豊穣願って昔から祭りやっとるさかい、それも必要やなって納得ができるけれど、全く人に任せてしまって毎日通勤しとれば「ほんなもん必要かいや」って「金さえあれば米買って来れる」ってなってくると、「祭りでもそんなたいそい（つらい）思いせにゃだめかいや」という理屈ができて、こんな傾向に徐々になってきとる。というかこれは、日本的な問題。

鉦打米について

ここは中山間地で、土質的に赤土が多いので、灌漑用の水

は山からの漂流水を活用して、水田に流しているということもあって、反収は少ないけど米はおいしいということは以前からいわれとったんで、中島町に農協があって米の倉庫が全部で 18 あって、18 の倉庫のうち一番先にからっぽになるのが鉋打の米だった。米は一般的なコシヒカリをいうんだけど、おいしいから先に売れてしまう。鉋打地区で作られているから鉋打米。ブランド化はそういうものや。そのなかでも、今作っているのは、有機堆肥っていうか、鶏糞堆肥を使って栽培している。化学肥料、有機肥料、農協からいろんな肥料あるんだけど、そんなの使わないで、暮れに鶏糞を使ってやっている。鶏の糞を乾燥させて年末にまいて、暮れ打ちをベースにして田植えをしている。６月から７月ごろに少し葉っぱの色がさめてくると追肥をする。追肥だけは有機肥料を少し使っているところもあるけど。できるだけふらないように、人手もないし高いから、鶏糞でまかなえるようにしている。もう早や４、５年しているんで、地力もついているんで、だいたい１年を鶏糞でまかなえるようになった。いろんな考え方、見方があると思うけど、一つは需要にあっただけの供給ができるかやね。そうせんと、産地やったと謳いだして注文したけどなかったっていうのは困る。だから統一した安定した品質管理をしながら、量的にも需要に間に合う、それがブランドやと思う。

普通の米との違いは、数字的なことを言うとタンパク質の問題やねぇ。米のおいしさの基準はタンパク質の含まれている量がどうかっていうのがあるんだけど、例えば７%以下っていうのがあるんだけど、僕らもなるべくそれに近づけている。いかんせん、米作り、農業そのものはその年の天候に相当左右される。自分の肥培管理、肥培計画通りにいく時もあるし、いかない時もある。今年は、今までは、順調やけどこれからどんな天候になるのかちょっと心配。だから、今まで、梅雨もあんまりなかったし、今年穂肥やったし、これから雨が続いたときにこんだけ雨が降って夏の晴天が続くと稲の丈が伸びると倒伏するし、倒伏するとやっぱり品質が落ちるし、本当に天候次第。今のままで黄色くなってくれればいうことなし。そんなわけにいかんやろう。

農協は鉋打米っていうブランド化ということはしていない。農協の能登わかばのコシヒカリとして売っている。だから、それが全国的な問題になっている。僕らとしては鉋打米をいくつかの個人的なところとか、米を消費するようなところに出している。東京の料理屋さんとかラーメン屋さんもいっとるな。ここの地区で作っている米の６割は自前で売って、残った４割は農協に出荷している。

営農組合の仲間による稲刈り

高校生へのメッセージ

自分も高校のときクラブ活動が忙しくて何にも家の手伝いができなくて、あとでそうやったなぁって。今の子供たちのいろんなことを見ていると、小学生も全然そんなのタッチしてないから、やっぱり、僕は小学校、中学校、高校のときにそういう時間を惜しまずに、農業なり植物を自分で作るんやとか料理するとかやっといたほうがいいと思う。そうせんと万が一の時、目の前に柿がぶら下がっていてもあの柿食べてみようとか思わんやろう。僕ら子供のときは、あそこの柿木は甘かった、渋かったと一生懸命に覚えた。それがおやつだったから、それを食べないと腹がすいてしゃーないから。今の人たちそうじゃないから。そういうふうになんでも口にしないと生きていけないということになりかねないから、やっぱり、食べるということは自分でやるんだということで、やっとくべきだと思うよ。高校生ぐらいのときに理論立てて。皆さん方が生きていく時には、まず味がわからんとだめやね。あの米がおいしいとかおいしくないは序の口なんで、やっぱり店はいったとたんにコーヒーの匂いがしたら、このコーヒーは入れたてコーヒーじゃなくてたてすぎたコーヒーだなって、カレーでも食べて、何とかのカレーだなーってわかるぐらいにならないと駄目だね。それを一生懸命やって!!　今からでも遅くないよ。食べないと生きていけないから、生きていくために、食べることにこだわった方がいいと思う。［取材日：2014年8月8日・9月6日］

PROFILE

村田　正明　むらた　まさあき

昭和23年4月23日・66歳
農業組合法人上畠農業利用組合ファーム上畠　理事（事務長）

七尾市中島町上畠生まれ。昭和53年2月に任意組合上畠農業利用組合を発足し、地域の中山間地域等直接支払交付金事業の共同活動及び、多面的機能支払い活動の中心となっている。
子どもの頃から農業に携わり、上畠集落の将来を案じていた仲間とともに、昭和61年度農事組合法人上畠農業機械利用組合の法人化設立に貢献し、以後事務局として地域農業の中心的担い手組織のメンバーとして活動。

● 取材を終えての感想 ●

私は、この「能登の里山里海人」聞き書き研修に初めて参加しました。私が名人の村田さんに取材に行って初めて釶打米というお米があることを知りました。名人に取材に行ってICレコーダーに録音してそれを書き起こしてレポートにまとめるのが大変でした。でも最後までレポートをまとめることができて良かったです。

私は学校で農業について学んでいますが、村田さんのお話を聞き、昔の農業と今の農業では機械や野菜などの作り方も変わってきていることがわかりました。これからの学校での実習がとても楽しみになりました。

この「能登の里山里海人」聞き書き研修を通して、あらためて能登の魅力を感じることができました。最後に、取材をさせていただいた名人の村田さん、私たちを支えてくださった先生方に感謝しています。「聞き書き」という貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

（堀下明香　写真：右）

私は、聞き書きに初めて参加しました。１回目の取材のときは、すごく緊張していて、上手く取材できるのか不安でした。でも、村田さんがすごく優しい方だったのでとても話しやすかったです。２回目の取材のときは、あまり緊張せずに話すことができました。取材を終えて、ICレコーダーで録音したものを聴いて書き起こすのは、周りの音や方言もあって聞き取るのがとても大変でした。

村田さんのお話を聞いて、子供の時から、農業や植物を自分で育てたり、料理を自分で作ったりしたほうがいいということがわかりました。これからはもっと料理に興味をもってチャレンジしたいと思います。

この聞き書き研修に参加して、貴重な経験ができてとてもよかったです。聞き書きに携わってお世話してくださった方々、村田さん、本当にありがとうございました。（山田香央里　写真：左）

受け継ぐ
― 三番叟への想い ―

吉田　外喜夫

聞き手・川嶋唯里　見砂佑香（学校法人七尾鵬学園　鵬学園高等学校１年）

中能登町の能登比咩神社

三番叟（さんばそう）守るため

私の名前は吉田外喜夫です。以前は役場に勤めていましたが、現在は退職し、家の周りを整理しながら、地元である中能登町能登部下（能登比咩（ひめ））神社に伝わる奉納神事舞三番叟を教えています。三番叟は子どもが踊る舞なんです。下出地区の長男という決まりがあって、年に１人選ばれます。私も長男でしたが踊ったことがないんです。しかし、18 歳の頃青年団で、三番叟に関わることができ、今では、三番叟保存会の一員を務めさせてもらっています。その三番叟保存会での取り組みは、祭りの約１ヶ月前から三番叟の舞の順番、動作の演技指導をさせてもらっています。子どもたちが１日ずつ成長し覚えていくことがやりがいです。

また、三番叟を教えること以外に、普段は畑・山林の手入れをしています。時間があるときは趣味の旅行や登山、映画鑑賞などをして楽しんでいます。充実した毎日を送っています。

明治から続く三番叟

三番叟とは、中能登町の能登比咩神社の春の例祭で、夜半に同神社で催される神事舞です。少年が１人で、終始無言で囃子方（はやしかた）に合わせて農事に関する所作を演じます。明治からの記録が残っており、１年の豊作を祈り、清めをなすものとされています。「前田利家が三州を領したことを民が悦び祭事を行い、乙女神楽を奉納した」ことを起源としているらしい。約 400 年前から三番叟があるようです。三番叟は昭和 59 年（1984 年）に旧鹿西町民俗文化財に決まりました。それを中能登町が引き継いでいます。

三番叟は元々秋祭りに行っていました。現在は子ども・親・地域の方の集まりやすいように、４月の第３日曜日の春祭りに行われています。

三番叟は歌舞伎と能が合わされた舞になります。「物事の初め」という意味をもつお祝いの舞です。五穀豊穣（ごこくほうじょう）の舞とも言われています。１年の豊作を祈り、清めのために行われていると言われています。主に１年 12 ヶ月の農作業の動作である、種まき・田植え・鳥獣の追い払い・収穫の喜びなどの演技を行います。主役となる少年は、決められた地区の８～９歳の長男でしたが、子どもが少なくなり、現在は小学４・５・６年生の長男または次男が務めるようになりました。昔から主役になることは喜ばしいことであり、家の誇りでした。現在は、子どもの数が減り、中には２、３回経験している子や兄弟が選ばれた家もあります。親も子も経験している家もあります。練習は３月中旬頃から約 20 日間、夜７時頃から保存会で演技を教える人が数人集まり練習を行います。

米の豊作を祈る

三番叟は１年間（12 ヶ月）の農作業の動作を表現しています。野座りをして待機しています。拍子木（ひょうしぎ）の音に合わせて面箱（面を入れてある箱）を安置した三方を捧持し、参拝者

（左上）祈りを込めて舞う姿
（左下）囃子にあわせて舞う少年
（右）衣装

子どもの体験談

体験を語る　梅木祐実さん

《昨年の秋祭りで三番叟を演じた少年》

「初めは、大変そうというイメージでした。練習がきついときもありました。でも、本番は、緊張しながらも、成功させることができたと思いました。自分がイメージしていたよりも、思い通りに楽しく踊ることができました。僕のお父さんも、三番叟を舞ったこともあり、家に帰ってからも少し練習したりしました」

吉田さんの「今でも舞うことはできますか？」という質問に、少し照れながらも覚えている演技を「こうだったかな？」と尋ねながら舞ってくれました。

《三番叟で笛を吹いた少女の感想》

「踊りの速さに合わせて吹かないといけないし、気を遣いすぎてもいけないので、難しかったです」

この少女に三番叟で使った笛も持ってきてもらい、実際に吹いてもらいました。

《父親のコメント》

「自分の子も舞うとは　思わなかったので、親子二代で舞うことができた事は嬉しいことだと思います。本番前には時々練習を見に行きました。この三番叟を絶やしてはいけない、受け継いでいかなければならないとは思っています。また、その時は手伝うことができたらとは思います」

に披露した後、面箱を元の場所におきます。昔から三番叟は面をつけずに舞います。捧持する面箱も元々は面を入れてあったと思われるが、今は入っていません。何時まで入っていたのか解りません。

拍子木が止まり「オオサイヤ　オオサイヤ　ヨロコビアリヤ　ヨロコビアリ　ワガヲモフコノトコロヨリ　ホカヘハヤラジトヲモフ」の謡に合わせて三番叟は拝殿の中央から舞いはじめます。

最初は年の初めの礼拝として三方を捧持して能面のお供えをし、次にお払い、それから田耕し・草刈と進んでいきます。次に右手を振って種まき・田植えの状態を表します。次に、うつ伏せになって前進するのが鳥追い、次は月抱えでこれは両手を開き名月を抱えて舞う格好です。やがて収穫・奉納へと進みます。最後に拍子木を打ち、笛を吹き、囃子をたて、戸を激しく乱打して御礼で終わりになります。このように農作業に関する舞を演じて祈りを込めて清めをなすのだと伝えます。

受け継がれる衣装と道具

三番叟の舞は少年が踊ります。三番叟に出演する少年は、顔に白粉を塗り眉毛や口元に隅取りを行います。装束は橙色の着物の上に、若松に鶴の模様入りの青色の素襖（すおう）を着け、同じ柄の袴に白足袋を着けます。頭部には、紺地に金・銀紙で形取った「日」「月」などを付けた引立て烏帽子を冠り、白鉢巻で固定します。引立て烏帽子とは、陣中にあって礼容を整えるために頂を引き立てた揉烏帽子（もみえぼし）のことで、出陣の際、兜の下に着用するものです。

三番叟は舞の他に、拍子木・囃子方・笛（横笛／白笛）があります。拍子木とは、二つ打ち合わせて鳴らす四角い柱形の木です。囃子方とは、拍子をとり、または情緒を添えるために伴奏する人のことです。横笛とは、横に構えて吹く笛の総称です。

三番叟に出場するのは、主役の少年１人・笛２人・拍子木１人、囃子方２～３人です。ちなみに今年は、主役の少年１人・笛４人・拍子木１人、囃子方２～３人だったそうです。現在の三番叟で使用している衣装・道具は、10 年前に新調した物です。これからも守っていき、受け継いでもらいたいです。

受け継ぐために

保存会は今から約 20 年前にできました。保存会ができたきっかけは、その時の区長さんがこのままだと三番叟がなくなるのではないか不安になったから保存会を立ち上げることにしたと聞いています。当時は、地区の区長さんと代表３、４人、全員で８人ぐらいいました。今は、組織的に名前はあるが実働しているのは３、４人です。この状況をどうしていこうか悩んでいます。

でも、三番叟というのは、年に１回春祭りで神社に奉納

神事舞の三番叟を見つめる人々

するものと伝承され、とても変わった神事舞だと思います。それを保存するにあたって、会を 20 ～ 30 人に大きくしても機能しないと思っています。この状況を考えながら、取りあえず少数で受け継ぐ方法を考えています。

これからの三番叟

伝統ある三番叟を未来に残していくには、今、後継者が必要です。現在の保存会には、私を含め同年代の方４人が活動しています。しかし、これからの三番叟を支えてくれる後継者となる人がまだ決まっていません。

熱く語る吉田さん

後継者は、三番叟の舞を子どもに教えてくれる人が一番、重要です。三番叟は、複数の人で教える舞ではないと思っています。１人の人が最初から最後まで教えていくことで三番叟という舞が成り立ちます。１人の人が教えていくほうが良いとされる理由は、以前三番叟の指導を２人で教えていたことがあり、指導者同士で問題が起こりました。それは、教え方の順番や舞の形や笛のタイミングなど、それぞれの考え方の違いが出てしまい、２人が教えると２通りの舞ができてしまいました。舞う少年が戸惑うようなことが起こりました。そこで、これからは舞う少年１人に対して、三番叟の舞を継承していくには、後継者となる指導者の中で、１人が伝統ある舞を少年に教えていくことが大切だと考えられるようになりました。

願い

一番の願いは、やっぱり『三番叟を絶やしてはいけない』という思いです。でも誰かがやらないといけないという様になってくると、その誰かは保存会の中で考えていかなければいけないなと思います。ほかに後を継げる人がいるとは思いますが、なかなか見つからない……。そこが難しいことなん

です。

今のままの保存会では、私が引退した時に誰も後を継ぐ人がいないと思います。保存会に入ってもらうためにも、若い人に声かけをしているのですが、皆、三番叟を教える立場という責任を重く感じて、なかなか保存会に入ろうとはしてくれません。でも三番叟を守り続けるためには、後継者が絶対に必要なのです。だから、今は、三番叟を守っていくためにも、次の世代に保存会を残していけるように頑張りたいと思っています。

［取材日：2014年8月8日・9月13日・10月4日］

PROFILE

吉田　外喜夫 よしだ　ときお

昭和30年3月15日・59歳
三番叟保存会　会長代理

以前は、役場に勤めていたが、退職し、現在は、三番叟保存会で会長代理を務める。毎年春祭りに行われる奉納神事舞三番叟を、主役に決まった少年に教えている。18歳の頃から地域の青年団に入り、約40年間、三番叟に携わっている。

● 取材を終えての感想 ●

私は、初めて「聞き書き」に参加し、いろいろなことを体験しました。名人に取材し、自分たちでまとめていくこの体験がとても難しかったです。取材やインタビューはしたことがあったから、どんなことを質問したらよいか？　聞けば良いかはすぐに思いつきました。しかし、この取材は自分たちで冊子を作るので、意味のある質問や冊子にして読者に伝わるように書くための質問を考えるのが難しかったです。取材の時も返答された内容が解らないところ、知りたいところを見つけ、さらに質問していくことが難しかったです。私はまとめることがあまり得意ではないので、すごく時間がかかりました。読者に伝わるように、まとめて書くのは難かったです。たくさん時間をかけながら、頑張ってまとめました。

この「聞き書き」に参加して、たくさんのことを学ぶことができました。自分も能登に住んでいるのに知らないことがあり、それをより詳しく知ることができました。この体験に参加してよかったと思いました。

今回取材し、まとめることは簡単なことじゃないということを知りました。難しいことだらけだったけど、少しは文章をまとめる力がついたと思います。この体験ができてよかったと思います。

（見砂佑香）

私はこの「聞き書き」に参加して、名人である吉田さんにお会いすることができて本当に良かったと思います。この体験で三番叟に対する人々の想いや、三番叟を今日まで残してきた保存会の成り立ち、青年団に入っていた頃から三番叟に携わってきた吉田さんの現在の想い、たくさんのことを三番叟という１つのことから、知ることができました。

三番叟について触れて感じた「想い」のすごさです。三番叟が明治から今日まで続いてきたのには、「絶対に絶やしたくない」という地域の人々の想いがあったからだと私は思います。未来にも残していきたいという強い想いがなければ、三番叟を残していくことはできなかったと思うし、これからにも同じことがいえます。吉田さんがおしゃっていたように誰かがやらなければ続けることはできません。現在保存会に所属している方々はきっと自分がやらないといけないという想いから三番叟を守り続けてくれています。だからこそ、これからの未来に三番叟を残すための後継者を早く見つけてほしいです。私は三番叟がいつまでも人の手によって残ることを願っています。（川嶋唯里）

川嶋唯里／見砂佑香／演じた少年／父親／吉田さん

人とつくるすいか

山上　一郎

聞き手・池田千華　森田美悠（石川県立羽咋工業高等学校１年）

山上さんのすいか畑

自己紹介

名前は山上一郎です。羽咋市粟生町に住んでます。昭和11年10月19日生まれ。家族は、妻が亡くなって、息子夫婦と、孫が長男と女の子２人。長女が27歳。次女が、今23歳くらい。

農業は、長男と２人でやっとる。後継ぎは私の長男がやります。今まで隣におったし、今はもう52やし、親子やし。「お前のやっとることは違う」とかは、言う。まあそれぞれに思いがあるし、すいかのことは分かっとるやろうと思っとる。マイナス面もプラス面も分かっとるやろう。言うても、言うこと聞かんときはあった。自分で何かしら考えてくれとるやろ。

農業をするために

高校では農業について学んだ。羽咋高校って学校でね。あのときは普通科と商業科と農業科と、女の人には家庭科というのがあった。そういう学科がたくさんあったわけや。私は農業科を志望して入学してんちゃ。そしたら担任の先生から農業に従事するときの心がけとか色々教わったわけやね。たしか、２年生か３年生の時やったかなぁ。校庭の一部に実習広場があって、野菜とかいろいろつくったね。苗の育苗の管理とかも学んだね。電気の配線で樹温をあげて、芽の発育をよくして、早期栽培をできるような野菜の作り方を習った記憶があるわ。その実習農場に種をまいてすいかをつくっているとき、連作障害っていう、すいかが大きくなってから枯れていってしまったり、変色して元気のない実ができたりしてしまう障害を知ったんや。それを防ぐために接ぎ木栽培っていうのを教わったわけや。あれから50年以上経つけ

ど、今でも私らのところでは接ぎ木栽培をやっとるね。

今、羽咋高校は普通科だけになったはいろ。農業科はうちらが卒業するときにもうなくなったんじゃないかな。それからは七尾の高校に、農業科の志望者は入学してんやろうけどね。今でも七尾東雲高校には商業科があるやろ。家庭科はもうなくなってしまったんやろうかねぇ…ちょっとわからんけども。

キッカケ

農業を始めようと思ったきっかけは、そうやねぇ…。まぁ、じいちゃんとばあちゃんが農業をしていたのをずっと見ていたからね。農業とはこういうもんやっちゅうことは小さいながらに思っとったねえ。高卒してからすぐにすいかをつくっとったね。粟生町は集落で、たくさんすいかをつくっとる人がおいでたから……。その人たちが生産組合をつくって、一員にさせてもらった。それから生産組合で農業をやることが本業になって、すいかをつくるわけ。生産組合ではね、そこに入っとる人と一緒に勉強会するげんちゃ。いろんなこと話し合ったり講師の方を呼んで教わったり。現地行って、これはどうすれば良いかという現地検討会をしたりするね。障害が出ていたら、これはどういう薬をやればいいかとか、色んなことあるはいろ。障害のことやら、つくり方のことやら、収穫時期はいつにすればいいか教わるんや。お互いに勉強するってことやね。

粟生町のすいか

品種的な問題から言うと、産地によってすいかの品種が違うがいね？　同じ羽咋の中でも産地、つまり生産組合が４つあるわけや。私達の住んでる粟生町は、その中の１つ。生産組合によって品種が違うもんで、自分らの土地にあう品種を選んで栽培しとるわけやね。

「能登すいか」は呼び名や。金沢行けば「金沢すいか」言うとるし、品種の名前ではないんやね。最初は中が赤くて丸いから、「丸紅すいか」と呼んでいたね。今はそれ言わんようになって、「能登すいか」に決まった。

すいかの手順

石川県の指導の下つくっとるんやけど、そこに自分の好みも入れたりしとる。やりやすいように栽培体系をつくってやっとるわけやね。

まず、すいかのハウス準備は２月の初めから。雪のある年は、雪をどかしてナイロンをかけて、準備をする。種をまくのは、早くて２月 20 日過ぎからまいて、そして何回かに分けて順々に「接ぎ木」をして、苗を育てていくわけやね。すいかの種をまく前に「台木」の種をまく。台木の上にすいかを置くわけやからね。２月に種をまいて、３月に接ぎ木をして、４月に 20 日前後に苗を畑に植えるということになるね。

そして５月 20 日頃にすいかのツルをのばして、花を咲かせやすくする。花は５月末に咲くんやね。それから、ハウスの片付けは５月末から６月の間にやる。私らのとこは「露地栽培」やからね。ハウスを使わんでつくるのを露地栽培というげんね。保温設備のないとこやね。普通の気温で育てるはいろ。最初はビニールのハウスで育てて、暖かくなってきたらハウスをとるんや。４月くらいにとると、枯れてしまうからね。

６月になったらすいかはピンポン玉くらいの大きさになるんや。そしたら、その中から良いものだけを残す。そして、７月 30 日頃に収穫するわけやね。

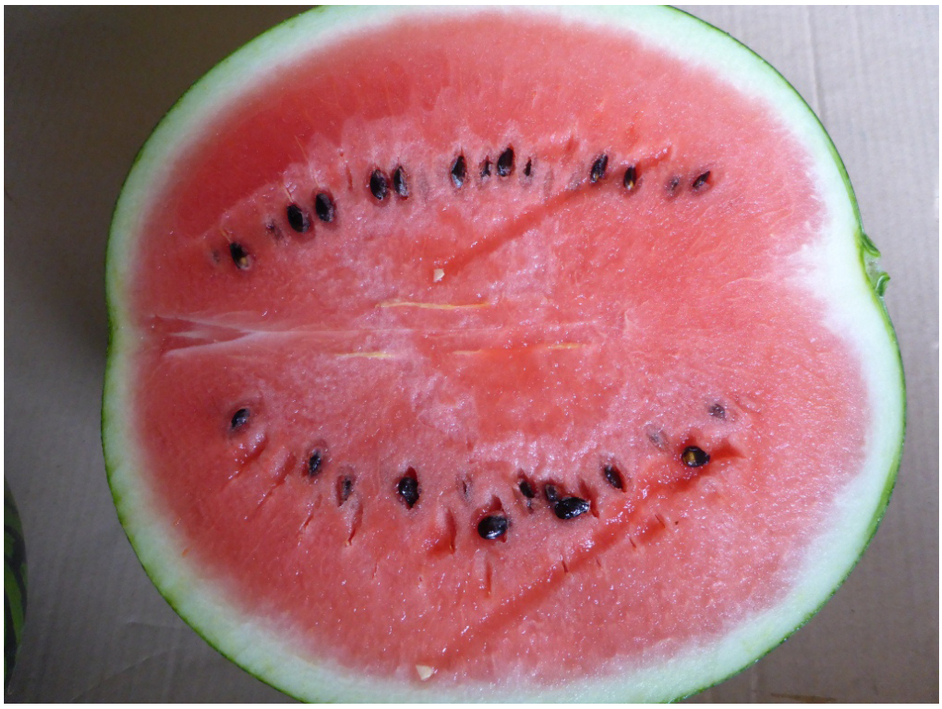
旬は、天候次第やけど、やっぱ８月やね。汗が流れ落ちるほどの天候やと、やっぱ、すいかはおいしいね。日光によって糖度が変わるんですよ。暑い日に、冷たい、甘いすいか食べられりゃあ、最高やちゃね。

肥料

肥料のやり方が品種によって違うげん。すいかができたときに、変形しにくいやつと球が大きくなるやつがあるげんて。それは肉質が固いげん。肉質が固い品種はスーパーで好まれるねんて。まだまだいろんな品種があるやろうけど、違いは肥料関係やね。材料は一緒や。「油かす」は何にでも適しとるんや。油かすっていうのは、菜種の油をとったかすのことで、すいかの日持ちがよくなるげんや。私のとこは、「甘喜（かんき）すいか」と「縞無双（しまむそう）すいか」っていう品種のすいかを育てとるんやけど、この２種類のすいかの違いは肥料の量やね。その畑によってもやる量が違うし。肥料はやりすぎるとすいかの形が変形するげんちゃ。丸くならなかったり、固くなったりね…。

接ぎ木

土に直接、すいかの種を植えてそのまま育てるんじゃないげん。そうすると、連作障害が出てしまうからね。すいかの芽がある程度育ったら、別の作物の根っこの部分（台木）を土台にして、そこに挿す。私は、かぼちゃの台木をつかっとるね。すいかに適した台木はかんぴょうと、かぼちゃがあるんやけど、かんぴょうの台木を使うと、すいかの実が柔らかくなるげん。逆に、かぼちゃの台木を使うと固めになるんや。固めのほうが日持ちするげんてねえ。逆に、やわらか



すいかの断面図

い肉質のすいかは、あんまり日持ちがせんげんて。日にちが経つと、果肉の色が濁った赤になる。どろどろした、生々しい感じになってしまう。売れ残るとそうなってしまうもんで、八百屋さんからも、「台木関係を見てくれ」って言われるわ。日持ちのするすいかは、いいがんに買ってくれるわけや。だから固い果肉がいいわけや。でも、固い果肉は、やわらかい果肉より甘みが少ないげんて。やっぱり、台木によってできるもんも違ってくるげんちゃ。

千里浜の土壌

すいかをつくる土壌には、酸性の土壌と、そうじゃない土壌があるげんちゃ。それによって肥料のやり方が違うげんて。

ときどき、土壌を測ってもらっとる。そいで、「この肥料を少なくしたほうがいい」とか言ってもらって、ときどき肥料をかえたりするんや。測るのはすいかをつくらん時やから、冬やな。窒素系が多いとかよく言われる。栄養がありすぎるのもまずい。窒素とか塩酸菌が多いとちょっと違うげんて。

うちらのとこは千里浜の砂地やね。千里浜の砂の粒は細かいげん。内灘あたりは粒が大きい。砂が大きいと乾きやすい。その天候にあわせた水分補給をせなだめねんや。その年、その土によっても違うんや。だから、その判断が難しい。どの土がいいかはわからん。

すいかの座布団

砂の上ですいかをつくると、どうしても日が当たらない部分があるげんちゃ。あれが黄色くなるげんて。黄色くなると商品価値が低くなるんや。すいかの下の部分を青くするために、白いマットを使うんやね。まあ人間でいえば座布団のようなもんで、穴が開いとってそこから光を吸収するマットがげんて。それを使って、すいかを青くしとるわけやね。

見極め

集荷場っていう生産物を集めるそういう場所を、農協のお世話でつくっていただいたんやね。自動的にすいか１個の重量を決めて格付けしてくれる機械があるんやね。秀品、優品、良品、並品、格外っていう５段階があって、その基準で格付けしてくれる。接ぎ木によってはこの段階違うけど、私らのとこはそういう階級でやっとる。格外っていうのは、その規格にも入らん悪いもんやっちゅうこと。変形したりしとるやつやな。今では少ないけど。今は昔よりそういう変形する品種が少なくなって、いいものができるような品種を種屋さんが考えておるもんで。すいかができたときに変形したやつは、かたがっとるんや。丸くなっとらんげんね。秀品なら本当に綺麗に丸くて、優品はちょっと変形しとるかなっていうくらいで。良品は次の段階の変形。だいたい並までが売り出せるな。今は並品やとちょっと買い手がおらんね。売るのは、

秀・優・良までやはいろ。それよりも下もあるんやけど、それやと商品価値が少ないんやね。買う人がだんだんおらんくなってね。少なくなったわ。格外が出た場合は安く売るかね。買い手がいない場合のは破棄することもある。

すいかが熟しとる見分け方は、叩く音でわかるげんね。100%とはいかんけど７割くらいはわかるわね。響きが良いのと悪いのと、数をこなすとわかってくるわ。響きが良いと、若いんやね。熟しすぎると、音が悪い。

スーパー行ったらすいかにシール貼ってあるでしょ。あのシールの貼り方一つでもいろいろ気遣ってるんやよ。切株から２センチはなしてシールを貼っとるとかね。まあ、見よいがんにせなだめやちゃ。

年間で売り出すすいかの数は、2014 年に組合に出した球数で 35000 個かな。去年は 40000 個だったし。その年の気温差によって球数がつかなかったり、多くついても悪くなって捨てたり…。その年によってやね。

すいかの他にも

すいかをつくらないときは、稲と大根を育てています。５月いくと休まるでしょ。稲もやっとるもんで…。すいかの次期が終わると、秋大根の方もみんな始めるんですよ。稲の種類はいろいろあるけど、俗にいうコシヒカリとかを主にやっとる。畑の面積は全部で５ヘクタールで、１ヘクタールくらいの大きさで稲をやっとるね。圃場整備されとるから。田んぼにも大小いろいろあってね。10 アールとか、大きいので１ヘクタールあるかね。

市場開拓

すいかを売って頂くためには、市場との取引をするんや。生産者も有利販売をしたいわけやからね…。

せりでは値をつける。量が少ないと高く買う場合もあるし、多い場合は安くなったりね。その時その時の状態やけども、その品物があるかないかで価格面に大分違いがでてくるんやね。今日は 1000 円やけども明日には 2000 円になる場合もあるし。2000 円でも 500 円になる場合があるし。市場でのやり取りということやね。

市場開拓をしてこっちが有利販売ができるような体制をつくりたい。そのためには電話１本で商いを頼むよりも、行って顔をあわせて話しあって、いい間柄になって売っていただく。初めて行ったときは縁がないはいろ。お付き合いをして、親しくなって、いろいろ言ったりあちらの意見も聞いたりして、便宜を図っていただく。コミュニケーション、それが大切やね。

継ぐ

粟生町の組合は、うちあわせて７軒の家がやっとるよ。そのうち後継者がいる家は２軒。後は定年退職した人の家が５軒やっとるね。その中で続けるのが難しい家もあってね…。羽咋市の農協の中で、後継者育成をやっておいでるというよ

出荷するすいか

うなことは聞いたりするんやけども。私らのような組合やと対策はしにくいんやね。外部へ勤めに行ってる方が多いから、後継者はだんだん少なくなっとるわね。集荷場を１つにしようという話はでとるわ。

次世代へ

とにかく努力することやね。何事も努力やろうけど。良いことも悪いことも頭に置いといて、頑張るしかないやろ。でも、本人が考えんとだめやわ。本人の意思がないと。

上手くいかない時もある。１つは天候やね。計算通りにいかんことがある。だからそれに対応するだけの努力がいるわ。失敗したがんもいい経験になる。上手くいかんくても、マイナス面をプラス面にするようにせな。

自分にとってのすいか

それは、生活の“糧”や。何十年とすいかつくってきたけど、いい年もあったし、悪い年もあったし、天候に左右されることが多かったね。

いいものをつくるということは商品価値を上げるということやから、それにあわせたメリットがあるわけやね。そのメリットを大きくせないかんから、いいものをつくる。だから、日々努力しとるんや。

［取材日：2014 年８月８日・10 月 20 日］

PROFILE

山上　一郎　やまじょう　いちろう

昭和 11 年 10 月 19 日・78 歳
農業

昭和 30 年からすいか栽培に取り組み、中京・関西圏に販路開拓し、羽咋産すいかのブランド化を行った。またすいかのみならず、水稲、大根などの栽培にも取り組み、大規模複合経営体として地域農業の所得向上を図った。能登の里山の砂丘地を利用し、すいかや大根等の農産物の栽培に取り組み、砂丘地の保全に努めている。

● 取材を終えての感想 ●

私は初めて「聞き書き」というものを経験しました。今までそういった、取材を通して文章を作成するということがなかったので、初めて経験したことが多かったと思います。

最初は上手く取材できるのか不安で、文のまとめ方もよくわからなくて、途中で投げ出したくなりました。でも、今回の聞き書き研修を通してたくさんのことを学びました。IC レコーダーなどを扱うこともそうですが、何より取材をしたことからいろいろなことを学んだと思います。質問の仕方や、相手の話を聞き、そこからさらに話を広げていくこと、そういうものは後に日常でも生きてくると私は思います。そして実際に聞く話は、インターネットで調べることの他にわかることがあって、とても面白かったです。また、私は初対面の人と話すのが苦手なので、取材ではコミュニケーションの取り方もわかりました。つらいことや大変なこともあったけど、この聞き書き研修に参加できてよかったと思います。（池田千華　写真：左）

私は、すいかが大好きです。なので、私たちが能登すいかの取材をすると決まったときは嬉しかったです。そして、能登すいかにすごく興味がわきました。１回目の取材は少し緊張して、うまく話せませんでしたが、山上さんの温かい人柄のおかげもあり、なんとか終えることができました。それ以降のインタビューも、山上さんの人柄に救われた気がします。

しかし、インタビューの書き起こしや、文をまとめることは本当に大変で、かなり苦労しました。でも、完成できてとても嬉しいです。

山上さんのお話は、私の知らないことが多く、とても勉強になりました。山上さんの農業に対する姿勢や、すいかに対しての深い思いが、とても強く伝わりました。

一つのことに生涯をささげるのは、本当にすごいな、と思いました。私も山上さんのような生き甲斐をみつけ、そのために生きていけるような人間になりたいと思いました。（森田美悠　写真：右）

守られ続ける伝統の灯り
―先人の思いを込めて―

角間　昭三
聞き手・加治谷梓　岩﨑鼓未（石川県立穴水高等学校２年）

虫送り祭の様子

はじめに（文化を育んだ風土）

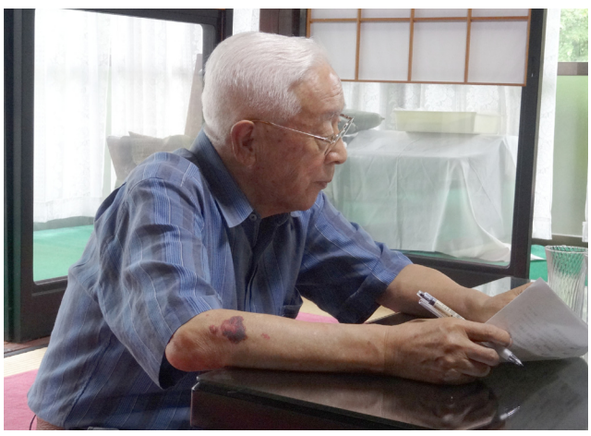
石川県鳳珠（ほうす）郡穴水町。日本列島中央部に突き出る能登半島の中央に位置する穴水町は、七尾北湾の入り江と奥能登丘陵からなる。町域の約 75%をしめる森林では、スギやアテの人工林が広がり、山林に囲まれた山間や盆地に安定した水田と多くの集落が営まれている。そんな風土で育まれた伝統文化が、ここ宇留地（うるち）地区にて守り続けられている虫送り祭、またの名をウンカ祭である。

自己紹介

名前は角間昭三といいます。生年月日は昭和３年３月 30 日。今は 86 歳で今度 87 歳になります。現在は２人暮らしですが、息子が２人で、孫も何人かいます。農業を営みながら虫送り祭に参加して、50 代くらいから代表者などもやるようになりました。代表者になって、８年目です。

伝統の地　宇留地

宇留地は穴水の西、山側にあって、三方を山に囲まれたと



角間さん宅にて

（上）祭りが行われる境内
（右上）宮でもらった火を持ち、水田をねり歩く
（右下）２班に分かれ、畦道を歩く

ころです。宇留地地区の特徴は、稲作が盛んで田んぼが多いところです。見ての通り穴水町でも１番か２番目に田んぼが多くて、中島（＊）とよく似たところがあります。

宇留地という名前は、うるち米という米の名前からきています。農業が盛んなので、虫送りがはじまりました。宇留地地区には正月からはじまって、11 月 23 日の新嘗祭まで１年間に祭が、10 回あります。宇留地地区は祭が多いです。他の地区で10回も祭があるとこはないんじゃないですかね。10 回あってその 10 回全部を奉賛会という組織が請け負って仕事してきました。１月１日から始まって、ほとんど毎月あります。あるときは１日２つの祭をするときもあります。そういう祭を入れて 10 回も祭がある地区です。その 10 回のうちの１つが今は６月の終わりの最終土曜日ぐらいに毎年している虫送り祭です。６月は害虫が活発な時期だから虫送りを行うんです。

古くから純農村地域であり、出稼ぎを行わずに稲作を中心に村の経済を維持してきました。山王川という川があって、水田を耕作するには非常に都合がよかったんです。稲作を中心に製炭を副業とする程度で村の経済を維持してきたことが、今もなお虫送りが存続し続けている要因の１つであると思います。

今でこそ他の地区の人口は増えてきているけど、昔は宇留地地区が一番人口が多かった。所帯でいうと 80 所帯ほどの家が昔からずっと続いていました。大町や川島町（＊）よりも大きかったんですよ。

＊中島……石川県七尾市中島町　この地区でも昔から虫送りが行われており、穴水町と同様にして牡蠣などの特産品も似ていることから、育まれてきた文化も近いものがあると考えられる。
＊大町・川島町……穴水町内の地区

虫送り祭とは（別名ウンカ祭）

虫送りというのは、当時でいう農村の知恵です。やはり、夏になると虫は明かりを求めてそのところにやってきます。それによって、紙虫（がみちゅう）というのと、泥虫と、昔はたくさんの被害を受けていました。宮に行って、もらった火の松明を持って、太鼓に合わせて「うんか（＊）うんか出ていけ、泥虫（＊）まいまいせい（＊）」とかけ声で畦道を歩いて、稲につく害虫を追い払っていたのです。かけ声には「害虫やはやく宇留地からでていってくれ」という意味をこめています。

稲についた虫をはたいて落としても、朝になるとまた稲に登ってきてしまうんです。農薬というようなものもなかったし、殺虫できる方法がなかった。今でこそ技術の進歩があって、豊作という結果を生んでいますけれども、当時としてはそういう科学的なものはなく、自然の摂理によって虫の特性を役立てて少しでも虫を少なくしようとしていたんです。少しでも多くの米を収穫をしようとした願いですよね。本当はどこの農村全体でもやっていたという歴史があるんですけど、だんだん廃れていってしまったんです。昔は電柱の下に油を張って、落ちてきた害虫を動けなくしたりもしたものです。期間は短かったけれど、こんな方法も用いて害虫を駆除

皆で松明を囲む

したものです。虫送りはそんな方法の中でも神事としてずっと昔から行われているものなのです。

＊うんか……害虫（イナゴなど）
＊泥虫……稲泥葉虫
＊まいまいせい…まって落ちていけ

祭当日の内容

9：00 ～ 12：00
最後に火を点ける２本のヌサ作り

13：00 ～ 15：00
神事及び境内の飾り付け

16：00 ～ 19：00
参加する子どもたちに歴史のお話や注意事項の説明

19：30 ～ 21：30
松明に点火し、虫送りを実施

祭は朝から晩まで行われます。暗くなったら虫送りをするのが本番みたいなものですけど、その前に境内の準備や、子どもたちへの説明も行っています。やっぱり、行事として後世に伝えていって欲しいと思いますから、分かる人だけが携わるのではなくて、町内外の子どもたちにも参加してほしいです。自分も小さい頃から農業の手伝いしながら虫送りに参加し始めました。２班に別れてそれぞれのルートを通り、火で虫を追いこんで川下にて燃やします。そのさいに、ヌサを一緒に燃やし、ヌサについている紙の燃え方で、今年の豊作を占っています。

虫送りの歴史

宇留地の虫送りは、江戸時代から始まったといわれています。元禄時代に生類憐れみの令が出され、山犬（おおかみ）を稲虫とともに太鼓で追い払ったのが起源といわれています。定かではないのですがね。今日まで 400 年間ほどずっと、１回も絶えたこと、中止したことがなくて続いているということがこの地元の自慢みたいなものです。ずっと守ってきたものですから。戦時中の男の人がいないときでも女の人たちが守ってきたという話が残っているくらいです。他のところはほとんど戦時中ぐらいからやめて、最近また復活してきたところがかなりありますけどね。ほとんどずっと行っているのは、石川県のここだけじゃないですかね。松任のほうにもずっと続けているところがあるって話もありましたけども。ずっと継続してきているのには、ひとつでもたくさんの米を収穫したいという願い、心情が込められているのではないかなと私は思います。

一致団結した行事性

この祭の光景から素直に感じられるのは一致団結した行事性への感動ですね。以前から火祭に対する興味から、火が人々に及ぼす心理的影響とは何なのか、考えたいと思ってい

（上）写真中央が角間さん
（下）写真右　角間さんと一緒にお話を聞かせていただいた小林さん

ました。火を象徴とする集団の行動にはその背景に父系制社会の原理があることを感じています。例えばこの宇留地でかつて虫送り祭に女性は参加できなかったという伝承にも接しており、同じことが他の火祭にもいわれています。

現代の虫送り

今では簡単にしてやっている部分もありますけど、昔とそんなに変わらないです。ただ、戦争で男性が多く駆り出され、女性の人手だけでは実施するのが難しかったときに、現在の形に簡略化されるようになったといわれています。昔より、田植えと泥虫の活動時期が、10 日から２週間早いです。ですが、祭の時期は変えることができないので、祭は昔のままです。

４つの集落があって、各集落が１人ずつ代表者を出して、その各地区の代表者の中でのさらに代表に当たるのが私です。昔は子どもがすごく多かったんですけど、今では宇留地地区自体で小学生が１人、中学生が２人か３人程度おるくらいで、今では出た人の子どもたちがこの時は帰ってきてくれたりして、この虫送りを支えてくれています。役場のほうでも「里山里海体験学習」という企画で子どもさんを募集してくれて、今年は 11 名の子どもたちにも参加してもらいました。だいたい４、50 人くらいは全体で参加してくれていると思います。獅子舞や笛太鼓も参加してくれるには、やっぱり人数が多くいたほうがいいですね。

祭への想い

なかったら寂しいのが正直な気持ちです。子どもだけじゃなくて大人もですけど、10 人以上子どもがいてほしいですね。それによって大人も集まるし、祭自体が賑わいます。

この虫送りでどれだけの虫を駆除できるかは正直分かりません。でも、毎年祭という地域の行事として、みんなで豊作を願うということに大きな意味があると思います。年にたった１日の行事ですけど、お世話する僕たちは１年をかけて準備をしています。絶やしてはいけないという思いもありますし、責任ですかね。でもこうやって協力していること自体がこの地域を守りたいという想いなのかもしれません。

今後の目標

虫送りは何百年も継続しています。ですが、石川県の中でも廃れてきています。こういう文化というものはだんだん寂れていってしまっているのです。

私たちは、祖先の素朴な願いをさらに磨きをかけて、それでもやっぱり多くの皆さん方に五穀豊穣というものも、やっぱりお米というものを大事にして欲しい。私たちが成長していくためには、お米というものは欠かすことのできない食料であるということを幼い頃から子どもたちとともに継続させていきたいです。機械化をされてもなかなか単価があがらないところに諸経費がかさむと、経営としては難しいけれども、やっぱり米は私たちが生きていくためには大事な食であるのです。小さいときから子どもたちは、ほんとの気持ちは分からなくても、私たちが虫送りをおこなったなぁと記憶の中に少しでも残していきたいです。

日本は神の国だから、神とともに昔の教えをみんなに参加して知って欲しいです。先人の願いを込めて、一粒でも多くの米を栽培して豊かな社会を作りたいという願いがありますね。［取材日：2014 年８月８日・11 月 10 日］

【出典情報】

＊1『図説　穴水町の歴史』 図説穴水町の歴史編纂委員会
北国新聞社　平成 16 年発行

＊2『能登の虫送り祭り～穴水町宇留地の事例から～』
小林忠雄　加能民俗研究九号

PROFILE

角間　昭三 かくま　しょうぞう

昭和３年３月 30 日・86 歳
宇留地地区虫送り祭代表

穴水町宇留地地区出身。農業を営みながら虫送り祭に参加し、50 代頃に虫送りの代表者として現在に至るまで続けている。昔から続く虫送り祭は地元住民だけに留まらず、町内外の小学校等にも体験・勉強してもらい、里山の伝統行事として次世代にも伝えていくことを継続している。

● 取材を終えての感想 ●

私は、今回２回目の能登の里山里海の「聞き書き」体験に参加して、やっぱり大変だと思いました。今回お話を聞くことのできた角間さんは、会う前まではどんな方かわからず、恐かったらどうしようと思っていたけれど、優しい人で安心しました。すごく丁寧に説明してくださって、不安だった私も安心して聞き書きを進めることができました。

虫送り祭は私の地元にもあり、私の地区では最後に竹を燃やすところは、河口際に集めて捨てて終了なので、宇留地地区のように最後に神社で捨てるところなど、私の所とはまた違った虫送り祭だったので、驚きました。それに、宇留地地区の虫送りは、昔、女性は禁止だったことや、１度も途絶えたことはないというお話を聞いて驚きました。私は、この地区にそんな歴史があったのだと興味がわきました。多くの貴重なお話を聞かせていただき本当にありがとうございました。「聞き書き」研修に関わって下さった皆さん、ありがとうございました。

（加治谷梓　写真：右）

初めて「聞き書き」という体験をしました。「聞き書き」というものを全く知らず、参加してしまったのですが、地域のことをよく知ることができる貴重な機会でした。取材はとても緊張しましたが、勉強になりました。初めて虫送りという祭を知ったとき、頭にハテナマークしか浮かびませんでした。どんな祭なんだろう、何をするんだろうと不思議ばかりでしたが、虫送りの代表者の角間さんや、小林さんに話を聞いて、よく知ることができました。資料や写真を見せてくれながら説明して下さって、とても分かりやすかったです。

火を使い、虫を追いこんで、駆除するのはとても頭がいいなと思いました。角間さんの言うとおり祖先の知恵は、すごいと思いました。現代にはない考え方を今も続けていくのはとても大変だと思いましたが、それができる宇留地地区の人たちは、素晴らしいなと思いました。貴重なお話をたくさん聞かせていただき本当にありがとうございました。

（岩﨑鼓未　写真：左）

美味しいいちじくを食べてもらうために…

高崎　進

聞き手・安達夏美　猿田桃香（石川県立宝達高等学校2年）

いちじく栽培の名人

私の名前は髙崎進です。生年月日は昭和 22 年８月２日。67 歳になったばかり。家族は母と妻と娘が３人。娘たちは所帯を持ったり仕事をしているので、今は妻と２人暮らしです。母親も健在ですが、現在老人ホームにお世話になっています。生まれも育ちも、ここ宝達志水町です。

いちじくについて

いちじくには桝井ドーフィン、ビオレソリエス、カドタ、バナーネという４種類があります。それぞれ葉の形が違ったり、実の形も少しずつ違います。ビオレソリエス、カドタ、バナーネは桝井ドーフィンよりも糖度が高いです。そのため寒くなってくるといちじくから蜜が垂れ、つららのようになって固まっているときもあります。

全国の農家のほとんどが桝井ドーフィンを栽培し、出荷しています。いちじくは８月の下旬からが旬です。

父から私へ

私がいちじく栽培を始めたのは、父が栽培をしていたことがきっかけです。もともとは、ぶどうの栽培をしていましたが、ぶどうの時期が過ぎた後にいちじくが出荷できるため栽培を始めたようです。昭和 46 年から押水でのいちじく栽培が始まり、父は最初の頃から携わっていました。減反政策という政府の指導で、転作作物、つまり、お米の代わりになるものとしていちじくに取り組み始めました。しかし最初は、いちじくでお金が入ってくるのかという意見もあったようです。

私は 35 歳まで別の仕事をしていました。ですが、実家の農業を継ぐために仕事を辞めいちじく栽培を始めました。

いちじく栽培の技術は、羽咋の農林事務所の技師の方と一

（左上）桝井ドーフィン
（右上）ビオレソリエス
（左下）カドタ
（右下）バナーネ

緒に奈良県へ行き習ってきました。そしてその方の指導のもと勉強をしました。そのあとも毎年、先進地視察ということで日本一いちじく栽培が盛んな愛知県へ行き、視察研修会を行いながら栽培技術を学んできました。

私自身は、父がいちじく部会の部会長だったため、父から習いました。

いちじく栽培

ほとんどは桝井ドーフィンを作っていますが、ビオレソリエスの出荷数の増加を目指してハウス栽培にも力を入れています。

いちじくの木の形を整えるため剪定をしっかり行っています。また、木の杭や棒を使って誘引をしています。

また、土の酸性アルカリ性を調べて、中性から弱アルカリ性になるように毎年 10 アールあたり 150kg の石灰を土にまいて調節しています。

肥料は、リン酸系の肥料を使って実が美味しく育つようにしています。

いちじくへの被害

いちじくへの被害は主にスリップス（アザミウマ）やカミキリムシという害虫が原因です。カミキリムシはいちじくの木に卵を産み、幼虫が木を食い荒らし、何もしなければ３年ほどでいちじくの木がなくなってしまうほどです。

害虫もほかに害獣の被害があります。その中でもタヌキとハクビシンからの被害が大きいです。ハクビシンはいちじ

木を使っての誘引

くの木に登れるため、実がなっている時期には毎朝約３パックほどのいちじくが食べられていたこともありました。昔はムクドリやカラスの被害もありました。

また、いちじくも病気にかかる時があります。一番恐ろしいのは黒カビ病です。黒カビ病は進行が早く、一晩で黒い帽子をかぶったようになることがあります。

部会とノウハウの伝承

いちじく部会に入っているいちじく栽培者は、現在 43 人ほどです。もちろん部会に入っていなくても栽培をしている人はいます。しかし、市場へ出荷しているほとんどの人が部会に入っていると思います。

いちじく部会に入っている 43 人ほどの人、ほとんどに後継者がいないというのが今の現状です。でも、いちじくの栽培方法などのノウハウは部会として蓄積しています。例えばですが、仕事を辞めていちじく栽培をしたいという人がいたら、部会に入っていただければすぐにノウハウを伝えることができます。

また、高齢によっていちじく栽培をやめられた場合は、その畑を廃園にすることなく他の農家の方が代わりに栽培するため生産量が変わらないというメリットがあります。これは非常に良いことだと考えているので、部会として今後も維持していかなければならないと思っています。

女性に人気のいちじく

いちじくは美容に良いと言われています。また、血圧を下げたり胃腸を整えてくれます。そのため、女性から人気の果物のようです。

最近では、痔瘻（じろう）にいちじくの乳液が効くのではとも言われています。乳液は痒くなりますが、タンパク質を溶かしてしまうような効果があるようで、いちじくを素手で収穫すると指紋が消えていってしまうんです。だから私は、ガンにも効いてしまうのでは……と思っているんです（笑）。それくらいいちじくにはものすごいパワーがあるのです。

昔はいちじくを使ってワインを作っていたこともありました。しかし今はもうやめてしまい、加工食品の原料として提供しています。主な商品として、「いちじくジャム」や「いちじくクレープ」などがあります。また、「いちじくワイン」

を復活させられたらいいなと思っています。

これからに向けて

私の一番の目標はやっぱり美味しいいちじくをひとりでも多くの人に食べてもらうことです。どうすれば実現できるか、日頃から一生懸命考えています。去年より一歩でも二歩でも前に進んで、皆さんに美味しいいちじくをお届けできればと思っています。［取材日：2014 年 8 月 8 日・11 月 19 日］

PROFILE

髙崎　進 たかさき　すすむ

昭和 22 年 8 月 2 日・67 歳
農業、JA はくい・いちじく部会会長

35 歳の時に実家の農業を継ぐために仕事を辞めいちじく栽培を始める。父親からいちじく栽培の技術を学んだ。現在は JA はくい・いちじく部会の会長を務めている。

● 取材を終えての感想 ●

初めは何をすればいいのかも全く分からず不安でいっぱいのまま取材に行きました。でも、髙崎さんの話を聞いているうちにいちじくに対する思いが伝わってきて、この思いをしっかりと伝えられるようなレポートを仕上げたいと思うようになっていきました。髙崎さんはとても優しく「何でも聞いて」と笑顔で言ってくれました。そのおかげで私たちは緊張せずに楽しく取材をすることができました。

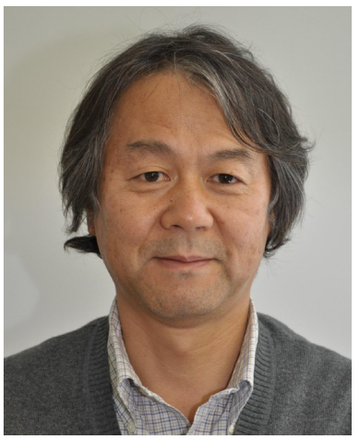
この「能登の里山里海人への聞き書き」を通して、いちじくの素晴らしさや名人の見えない努力を見せてもらうことができてとても良かったです。このレポートを通して、何か感じてもらえれば嬉しいです。この貴重な体験を活かして、これからも頑張っていきたいです。参加させてもらえて、髙崎さんに取材させていただけて良かったです。本当にありがとうございました。（安達夏美　写真：左）

今回、私は初めての聞き書き研修でしたが貴重な経験が出来たと思います。私はいちじくについて食べたこともなく、あまり見たこともない果物でした。とても緊張している中、１度目の取材の時、何から話せばいいかわかりませんでした。しかし、髙崎さんはとても優しく受け答えをしてくださり、スムーズに取材が出来たと思います。聞き書きを経て、私たちの学校がある宝達志水町には素晴らしい魅力があり、とても優しい人たちでいっぱいなんだと改めて実感することが出来ました。

この取材を通して、髙崎さんに出会えたことに感謝します。そして髙崎さんに出会わせてくださった主催者の方々や、先生、一緒に聞き書き研修をした仲間には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。（猿田桃香　写真：右）

「能登の里山里海の知恵の伝承」

竹田　純一



日本海に突き出し、暖流と寒流が合流する能登半島は、気候的に変化に富んだ地域で、さまざまな生き物を育む生命あふれる半島です。かつてはトキが舞い、今でも、オオハクチョウが飛来し、ホクリクサンショウウオやゲンゴロウ、海辺では、アワビや岩ガキ、タコが人々の暮らしに豊かさを与えてくれます。

幾何学模様を描き海辺の青と交差する棚田の色彩、茅葺や黒瓦の屋根、風土により異なる佇まいを残す能登の農家や漁師の家屋敷には、里山里海と共に生きるさまざまな知恵と技術、道具が継承されてきています。

里山里海の暮らし。能登に生まれ育ち、智恵を継承してきた人々への聞き書きは、高校生の心の中への記録作業であると共に、日本人の遺伝子の記憶、ふるさとへの憧憬を蘇らせる継承作業です。

聞き書きが、里山里海の真の魅力を、観光バスから眺める景観美としてではなく、先人たちから継承してきた里山里海と共に生きてきた智恵が織りなす生活文化としての審美として見つめ直されること、感じ共感しあえること、生活文化の厚みを紐解き、理解し、伝えることの喜び、新たなまなざしで、大切なものを守り、活かし、継承することを誇りと感じられる生き方、そんな心と生きる哲学を育てるきっかけになればと願っています。

里山里海の景観は、先人から代々、人々の思いと努力で伝わってきた現代への贈り物です。この贈り物を未来に引き継げるか、今、私たちの世代の価値観と行動が問われています。非効率で労力のかかる千枚田での稲づくりや、はざ干、家庭では使われなくなった炭と炭焼、将来の衰退が懸念される海女漁や揚げ浜式製塩法や、地域に伝わる祭礼行事、あえのことやキリコ祭り。長い歴史の中で育まれてきた伝統文化や祭礼を、高校生への記憶に残しながら伝え継承する聞き書き。聞き書きへの期待は、聞き書きを超えて、保存、保全、再現、活用、時として、現代ニーズに合わせた新しい生活文化として、蘇らせることを期待する取り組みでもあります。

棚田オーナー制度やキリコ祭りの担ぎ手ボランティアの例にもあるとおり、伝統農業や伝統文化に根ざした取り組みは、モノに物語を、コトに事の由来を蘇らせていきます。

安心安全を選ぶ、心の豊かさを求める、叡智を次世代へ伝える、里山里海とのつながりの再生は、能登の里山里海を蘇らせることであり、その本来の豊かさから、私たちが自然の恵みの恩恵をもう一度、いただくということです。

私は、能登の里山里海を訪れるたびに、新たな発見があります。数えきれいない智恵と技術は、旅人には、簡単に紐解くことができないほど、複雑で濃厚で豊かなものです。このモノやコトの由来、形あるモノの意味を知り、活かすことは、人生の喜びです。あなたも能登の里山里海をもっと、味わってみませんか。きっと、人生の豊かさが変わると思います。

竹田　純一（たけだ・じゅんいち／東京農業大学農山村支援センター事務局長）

1983年中央大学法学部卒、金融機関、英国技術開発シンクタンク、らでぃっしゅぼーや、（財）水と緑の惑星保全機構、京都大学大学院地球環境学舎非常勤講師（H21）を経て、現在、中央大学兼任講師、（株）森里川海生業研究所（代表取締役／里の所長）／里地ネットワーク事務局長、環境パートナーシップ会議（EPC）理事、認定NPO法人共存の森ネットワーク理事他。著書「森里川海の自然再生（中央法規）」、「みなまたの歩き方（合同出版）」「実践コミュニティービジネス（中央大学出版）」「日本法制の改革：立法と実務の最前線（中央大学出版）」「2100年未来の街へ（小学館）」その他雑誌への寄稿多数。

2 自然の恵みと暮らし

米を育てるということ
―環境にやさしい米づくり―

北風　八紘
聞き手・表ありさ　小杉真美（石川県立飯田高等学校１年）

自己紹介

私は北風八紘といいます。昭和 18 年３月 10 日。若山町出田生まれ。家族は夫婦２人だけ。子供は男と女と１人ずつ いるんですけど、息子は今、金沢で働いてて 46 くらいかな。帰ってくることはほとんどない。娘は大阪の方で。これも帰ってくる気がない。

私が農業を始めたのは 18 歳後半です。高校卒業して２年ほど京都で丁稚奉公してて、親が体壊して都合が悪くなったので。私三男坊なんですけど、長男と次男はどっちも公務員だったので帰ってこれなかった。だから丁稚奉公してた私が帰ってこれたので、それからずっとです。

米作りの工程

米作りはまず苗作りからです。昔は苗作るのは田んぼやったけど今はハウスの中で育ててます。種蒔きの準備はもう２月から始まる。種もみを用意したり、箱を準備したり、入れる土準備したりしながらやって、３月ぐらいまでに準備終わって、種蒔きするのは３月の終わり頃から始まって４月いっぱいくらいまで。

30㎝、60㎝くらい箱に種もみを種蒔きします。その種もみは水の中につけて水分を吸わせるっていうのと、その間にカチカチに乾いているやつを水に戻して芽が出やすくするっていう。１か月くらい水や池に入れたりしておいとく。で、十分吸ったところで温度をちょっとかけてやると、もみに芽がちょっと出てくる。肩をきるっていうけどね。ぽっとふくれるげんてね。そこまでするのに３月の終わり頃まで。

それから苗箱を用意して土入れて、自動で種蒔く機械があって種を蒔く。小さい面積やったらだいたい半日で終わる。１ha ぐらいなら３日で終わるかな。２ha あっても２日もあれば終わってしまうくらい。すえひろ（有機肥料で栽培するブランド米「すえひろ舞」）は 70ha ～ 80ha あるので

種蒔きでひと月ほどかかる。いっぺんに田植えできないのでずらして種蒔きする。１箱に 120 ～ 150 ｇほど。

それが終わって土入れて種蒔いて、その上に土をもう１回薄くかぶせる。で、水を充分やって、催芽といって温度をかけてやるげんて。で、普通ほっとくと１週間か２週間もかけて芽を出すんですけど、１週間も２週間も待っとられんのでちょっと温度をかけてやる。だいたい 40 度ぐらいかな。３月は寒いさかいね、８月上旬頃の温度くらいまで加温してやって。

だいたい３日ぐらいで芽がでて芽がそろうので、今度はそれをビニールハウスの中へやる。ばぁーっと並べる。その上に銀色のビニールの遮光フィルムをかける。それかけんかったら太陽に負けて真っ白になるげんて。そうさせんように、緑化させるためっていうか、ちょっと暗めにするのにシルバーのシートかけて置いとく。ほれも３日くらい置いとくと、芽出たとこが黄色いです。卵色っていうかな。３日もそうしてやるときれいなグリーン色になる。それでシートとって、それから水やり。毎日ではないですけど乾きぐあいをみて、水がきれたなって頃に水をやって、それを 20 日くらい。田植えができるような７㎝か 12㎝ぐらいの稲になる。それを機械で田植えする。

田植えが終わったら、あとは田んぼの管理やね。草やったり、虫やったり。病気をかからないようにする。健康な稲を育てる手立てをしながらやるんですけど。それでも虫がきたりすると、防除、消毒、化学薬品でやったり、天然のものを使ったりしながらやってるんです。一番あるのはイモチ病という病気。それが来たときにみてやる。だいたい最低１回ぐらいやります。菌と虫とに効くやつで。

穂が出て育って、８月くらいから実が生える時期。まだ倒れてるの少ないですけど、風が来ると、実が入って重くなるので。台風なんか来ると倒れやすくなる。早稲は大体８月の終わり頃に刈れるようになる。中稲は９月の 10 日くらい、晩稲は９月の終わりくらい。早稲・中稲・晩稲っていうのは、早い品種・真ん中の品種・遅い品種です。いっぺんに刈るのは大変なんで、早いのと、真ん中と、遅いのと別々に植えてやる。

刈って残った藁は土壌へ還元。前はほとんど刈って、ハザで干してたけど、今は藁、そのまま残しといて、来年の肥料の足しにして土壌改良にする。

機械化する米作り

基本的には、変わってない。土を耕して均して田植えしてって、ほとんど変わってないけど、最初に人間が全部やっていたものに次に牛が加わって、牛さんが人間の手伝いをするがんになって、んで、牛の代わりに機械が入ってきて、牛から機械に変わった。初めは小さい機械だったのにだんだんおっきくなってきた。

種蒔きについては昔は田んぼの中で稲育てたんやけど、種蒔きは田んぼの中で苗育て、それから、田んぼから箱に変わった。箱に代わると同時に、なんで箱に変わったかっちゅーと、田植えが機械に変わったから。機械でやる時は田んぼから持ってきたやつじゃダメなので、機械で植えられるような植え方にした。基本的に、やり方はちょっとずつ変わってきとるけど、基本的なことは全然変わってない。耕して、均らして、田植えしてってのは全然変わってない。人間から牛、牛から機械に代わって。ハザの代わりに乾燥機が入ってきて、ってどんどん変わってくけど。

NPO

山でもない里でもない、その真ん中、中山間地域ってゆうんですけど、その中山間地をいかに活かすかってゆう石川県で考えた中山間地域対策促進協議会てのがあってんて。金沢大学の先生と知り合って、金沢大学の駐村研究員制度というのを作り始めて、それが今の能登半島里山里海自然学校（金沢大学能登学舎）になるんですけど。金沢大学ってのは農業部門を持っとらんげんと。農学部がないんですて。金沢大学はその地域の活性化を図るための地域貢献活動に取り組んでいて、地域のことを活性化するなどの勉強会をしましょうとなった。

自然学校を作ったんは金沢大学なんで、いつ帰って行くかわかんないし、金沢大学が永久的にやるとは言ってないので、２年か３年やろな。ある程度どっかの文部科学省とか環境省とか、ある程度の事業の予算もらってやる仕事なので、予算がきれるとポンッと帰りんよね。最初からそういうことになりますよと聞いとったし。おらんくなってしまって、せっかくそろったもんもなくなってしまうのは……ってことで作ったのが NPO なんです。

NPO は主に里山の保全管理、維持管理の勉強と実施すること。やっとる場所は小っちゃいけど、山でいうと３haを今、保全管理している。

水回りの大変さ

田んぼへの水を引いてくる場所はそれぞれ違いんてね。川から引いてくるのもあるし、池からてのもあるし。その池も４つ山やったり川やったりいっぱいあるし。水の管理が一番、１人ついとっても間に合わんくらい。時期になると、２人でも 10 日かかるくらい。

今はね、地区によってパイプラインってのがあります。ポンプで水を送るやつ。田んぼでひねると水がジャーっと出

機械を使って田植えをしている様子

てくる。今はそういう風になってきたのでまだ楽だ。でも、パイプラインがあってもまだ大変。あっちこっちＵ字溝から水を引っぱってる方が多い。

春先にはＵ字溝の整備をします。溝掃除やったり草刈したりいろいろ。土がたまれば土を上げてやらんなんし、それを管理する仕事もたくさんあって大変です。今まではＵ字溝の掃除とか農道の整備とかは集落でやってました。本来は農業者だけでやらなきゃいけなかったけど、農業者だけでは管理しづらくなった。だから、集落のみんなで仕事しましょうということでしてました。

ところが今は集落で管理するとしても人数が少なくて大変。だから今は国が手伝ってくれます。多面的機能支払って言うんですけど、農村環境を守る事業に対して国から補助がでてる。その制度を利用すると管理については困らんくなった。

直に蒔く

田植えってもともと苗にしてから植えるって話をしたんですけど。直播（じかまき）は田んぼに直接種を蒔くってゆうやり方をしていて、機械で蒔くんです。モミ入れるタンクがあって、円盤がついててそれで溝を切りながら、溝を切った跡へ、ちゃんと落としてくそういう機械。前は手で蒔いたり、お父さんが担いでるような消毒するやつで適当に蒔いたり、ラジコンヘリコプターで散播したりってことをしてたんです。

直播を通じての生物の多様性

中干って作業をするのでね。機械がはまったりするので、乾かさなきゃいけない。んで、田んぼの水を切って乾かす作業をするのね。田んぼから水を全部落としてしまうので、田んぼ全体に水がなくなる。カエルとかもそうですし小さい虫なんかでも、水の中に住むやつは住めなくなるよね。それが直播をすることによって、水を張る時期がずれるんですよね。だから、手で植えたとこの水を中干にかかってなくなる頃に、ちょうど直播のとこが湛水状態になる。ですから、田んぼのあちこちに水が残るんだよね。なので、乾いたところから虫類はそっちへ移る。

今までやったら生物は６月の終わりころに水ぱっとなくなるので、行くとこなくてどっかに移ってかなきゃいけなく

なる。今はそうじゃなくて１か所は枯れても、もう１か所残ってるので。今までは成虫になる前に、これから飛ぼうとかなんとかしようかなと思うた時に、水がなくなるので育たなかった。でも、今はそうじゃなくてちょっと横を飛んでけば水があるので移動しながらだから育っている。なのでそういう意味で生物の多様性に役立っていると思います。

米の品種

一番多いのはコシヒカリですね。それから早稲品種でいえばノトヒカリ、それからユメミズホが増えてきとるね。それが早稲品種で。あとは餅とか、まだもっとありますけど、まあほとんどコシヒカリ。コシヒカリを直播するとちょうど、刈り取るのが 11 月前になってしまうがやて。そこまでいくと雪が落ちてきたりする時期になるので、そこまでは引っ張れないので、コシヒカリをちょっとだけ遅くする意味もあって直播をやってる。そうすっと 11 月入る前に刈れる。大まかに言えば、ノトヒカリとユメミズホとコシヒカリとモチです。直播の米もほとんど変わんない。

強い稲

（有）すえひろが平成７年にできたんですけど、それから減農薬減化学肥料にはこだわってて、一般的にいうと普通の農薬の半分くらい。中にはほとんど使ってないのもあります。稲自身に抵抗がつく。可愛い可愛いで育てるとすぐ病気になる。丈夫に育てると病気にもかかりにくいし、怪我もしにくいってのが稲も一緒。稲もそんながして、丈夫に育てると割と虫にも強いし病気にも強くなる。当然丈夫になるのでストレスも減るし。病気になってから治療するって形。あとは病気が来ないように先に予防したりするね。今はそうじゃなくて、予防じゃなくて防除になりつつある。一般的にはそこまでいってないですけど。土をきっちり作ってやると、土さえしっかりすれば、育つもんがきちっとしてくる。

農業と環境への配慮

減化学肥料、減農薬、除草剤はあんまり使わないあぜの管理の仕方だとか。まあ、使うことは使うんですけど、虫に優しい。虫に優しかったらあんまり良くないんですけど（笑）。でも、除草剤は使わずにほとんど手で刈ってます。あと直播もそう。意図してやってるわけじゃないですけど結果的にそうなった。意図してやってるわけじゃないけど自然的にそうなってる。

一番は農薬をあまり使わないってこと。今の農薬ってのは危険じゃないですよね。昔は１つ使うといろんな虫が死んだんですよね。だから益虫も害虫もない。まいただけで虫が全部死んだ。今はそうじゃなくて農薬をまくとカメムシ類にしか効かないような農薬の作り方をしてる。もうひとつはね、安全期間てがある。農薬をまいてから１週間ぐらいしか効かん、１週間経ってしまうと無毒化してしまうような化学薬品の作り方をしてます。

山や松林にヘリ防除やってたんだけど。６月ごろかな。ヘリ防除もそうなんですけど前はね、１回蒔くともう１カ月ぐらい残効だったんですけど、今は３日。だから蒔いたら３日しか効かん。前はヘリ飛んだら１ヶ月くらい山入るなってゆうたんですけど、今は飛んで帰ってたなあと思ったらもう入っても大丈夫なくらい。農薬に違いはないんですけど安全性がようなってきたってのは事実。ですけれどもなるべく使わないようにする。あと農薬を使わない理由はもう１つある。高いんですよね、やっぱり（笑）。使わないようにするってことは経費の節減にもなる。

だから環境に配慮するってことは大事ねんけど、実際は環境に配慮しようと思わんと経費節減しようと思ったら環境に配慮してたってことも逆に言うと言えることもある。必ず環境やなんかに影響しとる。だってあぜ草刈り、こんな草でやっとる本人は環境に優しいてさかい草刈りしとるわけではないでしょ。でも実際にやっとることにはそれすることによって環境に優しい農業になってくって話。だから真面目に農業してると環境に優しい農業をしてるってことになると思う。

ラジコンヘリコプターでやることになったのも環境に配慮にはものすごくいいですよね。今までみんな、朝から起きて３日も４日も１週間もかかってみんな農薬まいてたでしょ。したら、消毒自体がばらばらだったので、飛砂も多かったよね。粉剤なんか 100m も 200m も流れてったり。そんなあんまり良い環境じゃなかった。でもヘリでやるようになってからまいたところ以外にまで農薬がいくことてのを抑える効果はあるし、ヘリコプター入れることによっても環境に配慮した農業だと思ってる。ほれだけ意識してないけどそういうふうに変わってきてるのも農業だと思ってるね。

日本一のもの

なんせね、収穫てがは楽しいげわ。自分で作ったものを取り上げるって、ほれが一番楽しみ。おいしいとかまずいとかは後の話。とにかく初めて稲刈りしてできた米みるってほんっとに楽しい。嬉しいよ。それのために百姓やってるようなもん。面積が多くても少なくてもたぶん一緒だと思う。百姓てが特にそうなんですけど、収穫した時の喜びがまずある。苦労は忘れるやろうね、たぶん。何やってても。そうして結果的においしいって自分で食べて、あぁそうか、あ

れがこうなったんだって、いちいち思い当たるのが楽しいってかね、嬉しいかな。やっぱり日本にね、日本一てがいくつあるて知っとる？　これ数えたら米だけでもすごいくらい。だからみんな自分で作ったもんが日本一やと思っとりんて。まあそれがこだわりねんけどな、ひとつの。日本一やて言えばあそこにもあったでっていう話になりんけどな。やっぱり収穫したときの喜びってそれだけだと思うね。農家はみんなそうだと思うよ。一番最初にリンゴをこう、ばっととったその嬉しさっていうには。あとはもう２つ目くらいからはばーっといくかもしれないけど。でも、１個をとる嬉しさてがたぶんないと思う。収穫した時てがほれが楽しみ。

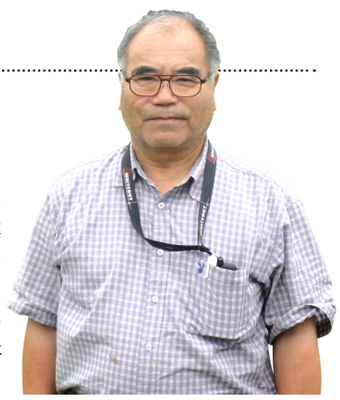
〔取材日：2014 年８月 11 日・11 月 27 日〕

PROFILE

北風　八紘　きたかぜ　はっこう

昭和 18 年３月 10 日・71 歳
農業

珠洲市若山町生まれ。平成７年にできた（有）すえひろで、減農薬減化学肥料にこだわった米作りしている。今は NPO に入っており、里山の保全管理、維持管理に努めている。国の力を借りて集落全体で協力して農業をしている。



● 取材を終えての感想 ●

今回初めて「聞き書き」をしました。北風さんにうまくインタビューできるか、ちゃんとそれをまとめられるか、不安がたくさんありました。でも、北風さんがとても気さくな方でいろいろな話をしてくださったので、なんとか完成させることができました。取材していくなかで、北風さんの米作りへの思いや里山を守ることへの思いがすごく伝わってきました。その伝わってきたことを忘れないようにいようと思います。

聞き書きをして初めて自分の町のことだったり、文章をまとめる大変さだったり、いろいろなことを学びました。こういう経験は何度もできるものではないと思うので、今回の聞き書きを無駄なものにしないように、今後に活かしていきたいです。（小杉真美　写真：右）

初めての聞き書きで大変だったのは、書き起こしです。タイピングも得意ではなく、１分という長さでもすごく時間がかかりました。でも、北風さんが細かく話してくれたことを正確に書き起こそうと頑張りました。その書き起こした文章を本誌に載せる用の文章にまとめる作業も大変でした。でも、北風さんが話してくださった文章を自分で理解しながらまとめていくので、より理解が深まりとてもおもしろかったです。

インタビューの時に聞いただけだと、たくさん話してくださったので頭に残るのも半分くらいだったと思います。でも、インタビューしたのを聞き返し、書き起こし、何度も読み返しながら、まとめることによって話してくださったことが頭に残りました。インタビューの時には感じれなかった自分の意見や感想が、まとめ終わってから自分の意見が持てるようになりました。

すごく地道で大変な作業でしたが、インタビューする力や文章をまとめる力、地域のことなどいろんなことが自分の物になりました。私たちの我儘にも笑顔で答えてくださった北風さん、本当にありがとうございました。（表ありさ　写真：左）

定置網漁に生きる
―能登の海―

中田　作助

聞き手・東山瑠花　宮藤莉奈　山下明星（石川県立能登高等学校２年）

自己紹介

昭和７年４月２日生まれ（83 歳）、昭和 26 年に地元の宇出津水産高校を卒業してからずっと漁師。子供の頃から海が好きやった。自分らの時、はじめは高校に 50 人おったが、漁師の方がいいと 30 人くらいになった。学校の向かいに造船所があって、仲間が「おら、明日からおらんぞ！　北海道、イカ釣りの船に乗る」と言って行ってしまった。

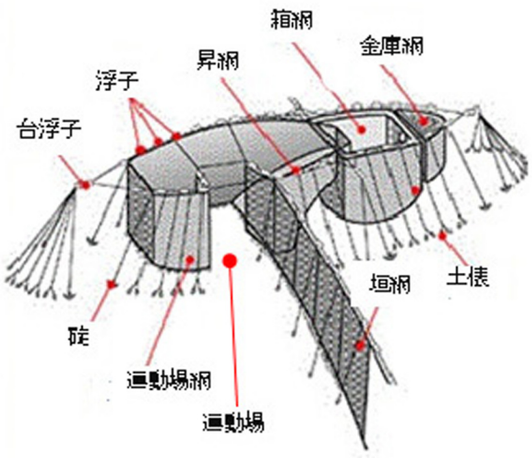
中田さん個人の番屋にて

定置網の漁師になろうと思ったきっかけは先代から、昔からやっとるからね。

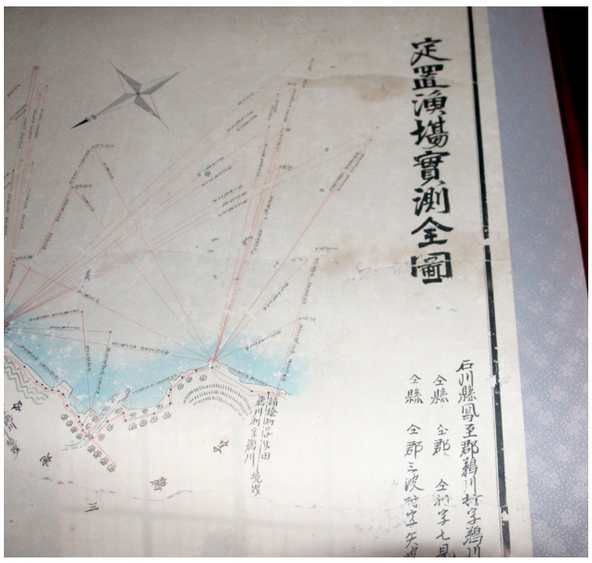
今普通に個人でやっているのが中型。株式みたいにしてやっとるのが、鵜川の日の出大敷やね。

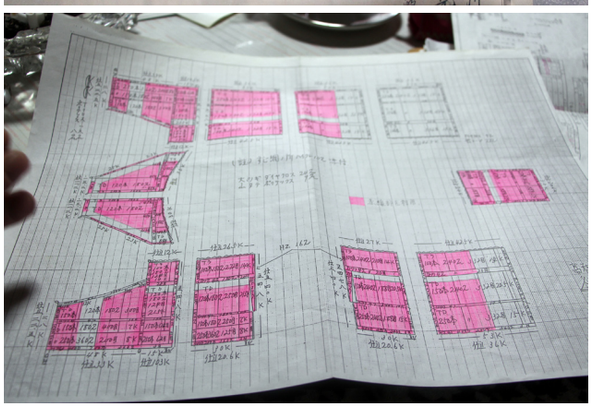
定置網とは

定置網は、土俵や碇で固定したもの全部を定置網という。そうして魚を捕る。網を敷設しておいて、朝起こしにいく。一番大事な魚が入っているところ「おとし」（金庫ともいう）は、昔は１か月半か２か月目位毎に網の入れ替えをしていた。でも、最近は環境にやさしい藻のつかない薬、防藻剤が出てきたから、７、８か月は持つわけや。山と一緒で春にな



定置網（weblio 辞書　水産大百科より）





（上）明治の定置網の測量図
（下）新しい網の設計図

れば芽を出し、冬になれば腐る。８月、９月に新しい海藻が出てきて、春先５月には藻も一緒で腐る。今入れてある網は、１年に１回入れ替えすれば大丈夫や。垣網とか種類はいっぱいあるけど、魚の入りやすいように魚の入るところは、防藻剤を使って藻がつかんようにしとる。農家やったら、田んぼの草取りと一緒や。

定置網の大きさ

俺のは、でかいので網の幅が 400 間（約 600m）、垣網が 5km 位やな。昔から、測り方は、両手広げて「一尋」（約 1.5m）そんな測り方でやるから道具はいらんのよ。だから、設計図面書いてやると合わんことがある。少々合わんでもなんともなかった。今ではそんなことはせんと、きっちり測っとるけどね。

定置網の種類

前は、季節ごとに魚の種類によって網を入れ替えとったが、今なら１年に１回、全部の魚に合う。昔のロープや網は綿やマニラ麻やったけど、今は化学繊維が多い。自分の設計に基づいて網を仕立てる。図面を書いて仕立て上げていくがや。

垣網をつたって魚は網に入って一番最後に金庫網にたどり着く。状況を見ながら揚げていくがや。たくさん捕れた時、いっぺんに揚げたら魚の値が安くなるし、傷むやろ。海の中やったら魚も生きとるしな。

イワシ網、タラ専門の網、一番大型が、大敷網！　定置網は、ブリ・タラ・マグロ・サバ・イワシなど回遊してくる魚、なんもかんも捕るわけや。しまいには、クジラまでかかる。専門の網は、タラなら冬の寒くならな捕れんし、海の底にある。イワシは水面まで浮いてくるから魚や季節によって網の種類が違うてくる。

定置網には知事さんの許可がいるがや。むかし明治に定置網の測量があったそうな。そん時の図面に七見と矢波のが書いてある。

新しい船

だいたい３億から４億、小さい船、大きい船もみんな入れてやぞ。今、日の出定置はもう１ヶ統おろすのに総額６億かかる。船もこしらえている。ユニック３台付けた大きい船（20t 位）が１隻に、小さい船が２隻あればいい。網は深くなれば、なお広げにゃならんし金はかかる。それに今ある番屋も傷んできてるから、新しがにしたいしなぁ、これも入れて６億や、また、借金。

１日の仕事

毎日、休み無しや。毎日網を起すがや。それでも、潮の速い時や風がある時は、起こされんしなぁ！　魚の種類はいっぱいでわからんけど、クジラからカタクチイワシまで何でもある。そんでも、それを捕ったら駄目やちゅうがやし。

朝の２時半に出航して５時に港に入ってくる。魚揚げて７時、船掃除して仕事が終わる１日やね。

気象と潮。暗いうちの仕事やから、前も後ろも真っ暗、船に乗っとる時は目が離せん。日中仕事するんとは違うよ。雨の日も仕事はある。倉庫行けばいっぱいあるけど、あんまりしてもね。若い衆を休ませんなんならんし、そうせんなぁ、人も集まらんしね。

ブリ街道

うちは、宇出津の市場と氷見の市場。ブリなんか、能登のブリより氷見ブリの方が高値がつく。海水をマイナス３度ぐらいにし、シャーベット状にし、魚の鮮度を保たせる。鮮度を保たせるには温度を下げ過ぎても駄目、マイナス３度がちょうどいい。氷見ブリになるには、ブリの色が大切なんや。ひと仕事が、大事なんよ。

海水を凍らせるには時間も電気代もかかる。そうしなければ、高く売れんしね。

ブリ街道とは、名古屋までの高速を使って運ばれているが、あの街道沿いにノーベル賞の学者さんが多いやろ。ブリ食うとるさかい賢いんや。ブリ街道じゃなくてノーベル街道やったりしてなぁ。

船の大きさと乗組員について

14t の大きさは 17m、19t のもある。おれは２隻もっとるし、大敷が７隻。魚捕るには大きな船１隻に小さい船が２隻はいる。船の位置を三角にして魚を捕る。３人はいる。家の網には３人若いもんがおる。船頭・船長・機関士がみんなそれぞれの仕事をしとる。

年は、30 から 40 前の若いもんもおるよ。60 代の連中もおる。学校出てすぐ来る 20 代のもんが日の出にはおる。機関士・無線士もいるからなぁ。来年は、若いもんが３人は入っ

（左）中田さん個人の船
（上）製氷機
（下）海水を取り入れ、製氷する
（左下）日の出大敷の船

てくる。定年退職して漁師しとるもんもおるよ。いろいろやなぁ。

環締方式とは

一度、網に入ったら金庫網に入って出られなくなる。婆ちゃんがもっとる巾着の袋あるやろ、あれと一緒や。昔の網は、人が 60 人もいった。一度の網を降ろすのも上げるのにも苦労した。昭和 25 年ぐらいから、機械も手に入るようになり、エンジンつけて 20t クラスの船使って、ロープの巻き取りも機械にさせる。でも、網の掛け方にも工夫がいる。能登町で船にユニックをつけたのは、俺や。トラックについとるのと同じや。たった３人で 10t、20t の魚をとった。こころの船も真似してみんな船に機械つけた。工夫をした環締の網と船で会社組織になった。七見の漁師の多くは、底定置の網やったから、タラを捕る網がほとんどだった。

少し前までは、１月のタラは腹に子や白子がおるのが当たり前やったのに、最近は２月３月になっても腹に子（白子も真子）のおるタラがおらんのや。水温が違ってきたんかも。乱獲が原因か、産卵場所が違ってきたのが原因なのか……。でかいタラは、腹に子をもっとるタラなら目方が５、６kg あるが、子の無いタラは２kg ぐらいしかない。今は、鵜川には底定置の網はもうない。

定置網と底定置網の違いは、底定置網ほど人間がいらん。15m ほどの網の高さがあればいい。刺し網と一緒。底の魚は、カレイ・タコ・アンコウなんか。海底から 15m の位やなぁ。定置網は底につかない。もちろん、魚が遊ぶところ (運動場) は、底につけるけど。ついている所とついていないところがある。底定置網をしとる人はここらでは今はいない。だんだん、みんな大敷のような定置網にしとる。

海の魅力

朝早く起きて行くけど、こんないい商売はない。たいそうな時はたいそうやけど、一旦、網を降ろしてしまえば楽や。入れ替えとか管理とかしているだけや。防藻剤もあるし楽になった。これから網も改造したり一杯やることがある。人間を使わんと、楽して魚を捕る網をこしらえるかが問題やね。

雷が鳴ると鰤起こしていうて、低気圧が来るから、ちょうど、そのときにブリが捕れる時期となる。季節の寒暖。時期にあるもんや。天気が良くて、寒い日の、南西の風が吹くとブリが捕れる。もうすぐやわいね。

後継者について

大敷きの方は 11 人おるが、来年から 18 人にしようと思

日の出大敷の番屋

うとる。定置網の仕掛ける場所は衛星で測っとるし、知事さんの許可がある。主な仕事は、たるみが出てきた網を締めて張りに行く。全長 3000m ぐらいの網をね。深ければ深いほど浮いてくる網に鉛を織り込み重くする。その網に鉛を付けてさらに重さを付ける。これが日の出大敷の定置網や。

ちょっと前には、他の漁場の人でタイヤ（浮沈式ホース）にエア入れて浮かして付けて空気を抜き重りにする。エアが入っていたら浮いてくるからね。この方法は安上がりだからタイヤを使って定置網をしとった人もおるけどね！

日の出の定置は、定置網の設計図を作りそれをもとにみんなで仕事しとる。

今後の取組み

新しい網や船で、楽して魚捕る。そのために機械化して、海の仕事したい若い衆が頑張って魚を捕り、漁の楽しみや醍醐味を味わってくれることで、この能登町の定置網漁の漁師を繋いでいくことかなぁ。

［取材日：2014 年８月８日・12 月２日、写真 12 月 14 日］

PROFILE

中田　作助 なかだ　さくすけ

昭和７年４月２日生・82 歳
漁業、有限会社「日の出大敷」役員

能登高校の前身石川県立宇出津水産高校を卒業後、家業の漁業を継ぐ。環締方式・船にユニックを取り付けた網あげ・ロープの巻き取りの機械化・製網会社との共同研究による網の研究等先見の明を持った漁師であり、経営者である。様々な手法を凝らした定置網漁を取り入れ、２人で漁ができる効率化を図った。

● 取材を終えての感想 ●

初めて「聞き書き」を体験してとても勉強になりました。中田さんに定置網についてインタビューして、魚の習性に合わせた網の仕組みにとても感心しました。

中田さんの話を聞いて一番印象に残っているのが網の大きさや船の値段など、漁業に関する単位が桁ちがいに大きかったことです。

私の兄は、日の出大敷の漁師をしています。いつも「番屋で食べる魚やご飯がおいしい！」と言っています。漁業のことを知る機会になり、とてもよかったと思います。（宮藤莉奈　写真：左）

私は、この研修を通していろいろなことを学ぶことができたと思います。インタビューの準備として、質問を考えるのですが、なかなか思いつかなかったり、インタビュー中に何度かつまってしまう場面がありました。でも、そんな時、中田さんは船の模型や図等を使って丁寧に教えて下さいました。

書き起こしは、その地域の方言があったり、漁業の専門用語がたくさんありとても大変でした。でも、定置網漁を繋いでいこうとする中田さんを取材していく中で、こんなに頑張っている人がいるんだと感動しました。私たちの原稿を読んで少しでも多くの人に中田さんの思いが伝わればいいなと思いました。（東山瑠花　写真：右）

私は、この聞き書き経験で、本格的なインタビューをする時にすごく緊張していました。インタビューをしている中で、漁業の専門用語が使われると理解できなくてとても大変でした。

でも、その中でどういう意味なのかを聞くと、中田さんはちゃんと説明してくださいました。実際に使っている設計図や、船の模型を使って説明してくださり、少しずつ理解が深まってきました。インタビューは、次から次へと疑問を解決しながら進むものだと感じました。漁業についての事前学習の必要性も感じました。

本校は、石川県で唯一の水産コースがある学校のため、原稿を仕上げるまで専門の先生がいろいろ教えてくださいました。この環境があって、私たちの原稿をまとめることができたことに感謝しています。

（山下明星　写真：中央左）

赤崎の街並み
―歴史と文化、自然―

本多　達郎
聞き手・今江つゆみ　山科佳奈子（石川県立志賀高等学校２年）

自己紹介

私の名前は、本多達郎です。昭和 13 年５月５日生まれ、平成 26 年で 76 歳になります。石川県志賀町赤崎に住んでいて、「富来観光ガイドの会・又次」の会長をしています。家族は私達夫婦だけですが、違う場所に長男と娘夫婦と孫が１人います。

私は生まれてからこの赤崎の地で生活してきました。若い時は夫婦ともに教員をしていました。退職してからは、自然の眺めが清らかで美しく、昔から歴史のあるこの富来の地を多くの人々に知ってもらおうと「富来観光ガイドの会・又次」の会長をしています。

室町時代

ここはね、今では町の名前が志賀町になっとるけど、その中の富来でしょ、その富来の中の西浦地区というんです。志賀町の一番北で隣が門前町、今は輪島市になってますけども、その隣がここ西浦地区なんです。（注：平成 17 年に富来町と志賀町が合併し志賀町に、平成 18 年に輪島市と門前町が合併し輪島市となった）今は無くなっとる集落もあるけど、昔は深谷、前浜、それから笹波、鹿頭、小窪、赤崎という６つの集落があったんです。赤崎と前浜は、西浦地区の中でも新しいんですよ。石灰岩などの水に溶けやすい岩石が、波に侵食されてできた地形になっとる関野鼻とか、観光で有名なヤセの断崖とかって行ったことあるかな。赤崎の南の隣に千ノ浦という集落があって、これも古い。それこそ縄文・弥生時代からの集落です。他にね、本なんかで調べると、西国の方から海女さんが赤崎へ流れ着いて、漁をしとったという記録も残っとる。海女さんは、舳倉島へ行っとるっていう記録もある。佐賀県と長崎県とかの海女さんがね、そういうところから来とるんやね。いろんな所から集まってきた人達によって室町時代の終わり頃には、ここの赤崎の集落が出来ていったことは事実ですね。そして、段々人口が多くなってきたんですね。室町時代からどこも集落が出来てきとるん

です。

赤崎も、はっきり分からんけども私の考えでは室町時代ぐらいに、ここに集落らしいものができたんじゃないかなということです。伝説では室町時代に、富来の東増穂に飯室というところがあって、今は土地の名前だけが残って人が住んどらんけど、飯室の人達が一村赤崎へ出てきたという話があるんです。飯室は田んぼが少ないので、日照りが続いたりすると作物が採れんで、そんな時に限って山の動物が降りてきて田んぼや畑を荒らす。今と一緒で段々そうなってきていますけどね。タヌキとかムジナだけじゃなくて、イノシシとかシカとかが出てきて田んぼ荒らしたんだと思います。そこで田んぼを作っておれんということで、どっか良いところがないかみんなで相談したところ、ここが空いとったということで人々は赤崎に住み着いたんです。小さい船持ってきたり、船小屋みたいなもんを造ったり、田んぼでいうたら出作りみたいな感じで漁師の生活しとった。

出作り

出作りっていうのはね、ここに家があるのに他の土地へ行ってそこで作物を作って収穫したらそれを持って家へ帰ること。高浜（志賀町）でも若狭の高浜（福井県）から出漁に来とったんですよ。そして、秋になると帰ってんわ。高浜の川尻（志賀町）周辺には若狭から住みついた人がいた。大念寺（志賀町）があるやろ。大念寺新町という名前でその人達が住む権利を貰ってね、それが段々大きくなって今の高浜の町になってった。そういうふうにして、赤崎も同じで、出張して出漁に来てたらしいです。飯室の人達はそれを聞いて、赤崎に住みついたら百姓で食べていかれんでも、ここの海岸で漁をして食べていけると分かったから赤崎に住みつき始めたんです。

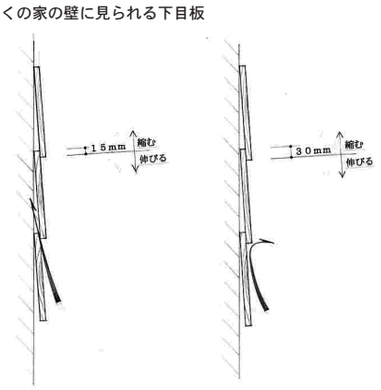
ここは砂浜やけど、この横は岩場です。ちょっと浜へ出れば、魚も釣れたり、貝の種類もたくさんある。ヅメとかシタダミとか食べたことあるかな。美味しいですよ。こういう貝とか海藻なんかを食べても生きていけたりするんですよ。それから、伝馬船で沖へ行くとね、浅瀬でドコバというとこが赤崎の沖にあるんですね。ここの沖は、暖流も寒流も流れてきとるもんで、たくさんの魚が集まるんですよ。今でも、西海や西浦の漁業やっとる人達は、赤崎沖のドコバへ行って、ハチメとか、ブリ、マグロ、回遊魚の青魚を捕るんです。クジラも来たりするもんで、ここは魚の宝庫やから食べる物には困らないんですよ。

下目板

赤崎にある家の壁は昔から下目板なんですよ。白壁とかモルタルとかは駄目なんです。下目板っていうのはね、屋根に近づくにつれて板の形が少し細くなって板と板の間に

住宅のすぐ近くまで迫る海
（今、海岸は波返し、防波堤のテトラポット、離岸堤で３重に守られている。）

赤崎地区の多くの家の壁に見られる下目板



《参考 URL》夢工場 www.kanazawa-net.ne.jp/~yume/shitame.html

隙間が出来ないような形になっている板ねんわ。下目板の特徴は、夏になると風を通しやすくして、雨の日とか冬は板が水をたくさん含んで板同士がくっついて、風を通しにくくするっていう良いところがあるんです。特に、ここ赤崎の街並みはなんといっても海と家がすごい近いもんで、やっぱり潮風が強いんですわ。ほやから、風が強くて雨も横からや下から吹きつけるように降るわけよ。ほしたら、普通の板の合わせ方やと駄目なもんで、こういう三角形みたいな形になっとる。今は同じ厚さの板を２枚重ねてる家も多くなったけどね。

潮風の影響

あんたらのところはどうか分からんけども、ここは家に潮風がバーンと当たるんやよ。ものすごい潮風がね。瓦の葺き替えは、あんたらち何年くらいでしとるかな。富来でも山の方はね瓦が 50 年くらいもつんですよ。普通、場所によっては 30 年から 40 年はもつところもあるんですよ。でもね、ここはね、15 年か 20 年しかもたないですね。今の瓦は釘で打ってます。ステンレスの釘でどんだけもつか分からんですけども、15 年か 20 年で葺き替えせんならんですね。それに、サッシの戸や戸車なんかでもすぐ錆びてしまうんです。

もう一つ、赤崎は潮風で木が駄目なんですよ。木が駄目なんに、木が生えとるじゃないかって思うかもしれんけど、これは決まった木なんですよ。庭にあるトベラとかね、モチの木、シャリンバイの木です。それから、ツバキの木とか。イチイの木もありますけども、そういうふうに葉っぱの厚い木しか育たないんですよ。非常に潮風で殺風景です。街並みを見て分かったように、こんな殺風景な家やけども、私はね、やっぱしここに住んどったら庭が欲しいなあーということで、庭を自分で造ったんです。あんたらのところに庭があって、その庭に生えとるカエデの木とか、それから紅葉する様な木ね、欲しくてもってきても、赤崎では潮風で枯れてしまうから駄目なんですよ。だから、一遍持ってきて植えるとね、その年はまだ赤い葉っぱが出ますけどね、次の年は枯れてしまって駄目になってしまうんですよ。そこでどうしたかっていうたら、大小の石を配した石の庭にしたんですよ。私の家の庭は赤崎では特別広いんですけども、潮風でも大丈夫なように石の庭にしたんですよ。そして、木は潮風に強い木にしたんですよ。庭は志賀町の山岸造園に来てもろうてしたんです。庭にある２本のモチの木はね、私が生まれる前の大火の時に半分以上焼けたんです。だから黒くなっとるやろ。切ってしまおうと思ったら芽が生えてきて今はこんな大きくなったんですよ。ここには昔納屋も蔵もあったんですけど、私はやっぱり庭が欲しいということで庭を造ったんですよ。大体、庭は私が設計した。私の家のすぐ後ろに崖があるでしょ。庭の石はその崖から落ちてきた石を積んだものです。他にも前の庭にあった石や、買ったり集めたりした石もある。この赤崎の殺風景の中に、やっぱし１軒でもこういうところが欲しいなあと、そういうことで庭を造ったんです。だからこの家の庭は他の家の庭よりも大きいんですよ。ほやけど、大抵皆庭を持ってるんですよ。入り口だけ見たら殺風景で、奥の方に庭があるっていう感じやろうけどね。これも一つの抵抗です（笑）。

76年前の災害

赤崎の家で、古い家は何年もったかっていうと、やっぱ 100 年以上もっとる家もありますよ。私の家の両隣の家なんかは建ててどれだけ経ったかというと 76 年経ってます。76 年経っとるっていうことは私が生まれた時からということです。この家は火事で焼けて、何年か後に建てたもんですから新しいんです。

赤崎は非常に土地が狭い。昭和 13 年５月に私は生まれたんやけど、３月に大火事があったんです。赤崎の３分の１ぐらいが燃えてしもうたんです。その時にみんな、屑屋っちゅうか藁屋っちゅうか、瓦の家が１軒も無かった。それから家が密集しとるもんですぐに燃えてしまったんですね。その後、ここら辺は瓦の立派な家がだんだん建つようになってきたと言われていますね。

戦争の後やけども赤崎は、漁もしとったけども、海岸の集落やから田んぼとか畑が少ないんですよ。ほやから、初めは長男がここで百姓しとったんやけども、次男、三男は日本水産とか大洋漁業とかの船員として海外へ出とったんです。日水や大洋じゃなくても郵船とかタンカーとかね、そういうふうな船に乗ったんですよ。その後は、長男も嫁や子どもを残して、ここのほとんどがその船乗りになったのです。まぁ１軒の家に船乗りがおらん家って少ないぐらいだったんです。それがすごい景気がよくて、船乗りが儲かったんですよ。特

本多邸の庭。背後に崖が迫る。

窓が少なく奥に長い立派な赤崎の街並み

に捕鯨船、大洋漁業かなんかの捕鯨船はものすごい儲かってね。そんなもんで、ここの人達は船乗りで非常な金儲けしたんです。金たくさん持っとるからここで家建てたいけど地面が少ない。地面が少ないけどもそこに家建てるっちゅうことになるとどうなるかっていうたら、その地面一杯に家建てたんですよ。ほやから、密集しとるんです。

家の前が、すぐ海になっとるもんで潮風が当たるから、納屋にしたり蔵にしたりするんです。そして、窓をつけないで本当の住宅は奥へ入っとるけども、まぁどっちにしても、その狭い地面一杯にみんな家を建てたんです。それが今の赤崎の街並みなんです。

赤崎への思い

今では、船員が全然ダメでね。漁業だけで食べていけんげんわ。若いもんがおらんようになって、子どももおらんようになって、今は小中学生入れても５、６人しか赤崎地区全体でおらんがじゃないかな。昔は赤崎だけで、我々の同級生だけでも 15 人おったんです。今はね、赤崎の人口は 250 人ほどしかおりません。私が区長しとった時の最後（平成 22 年）が 300 人でした。戸数は 120 軒ほどあったんですけど、今じゃ 114、5 軒になっとるんじゃないかなと思います。数からいえば集落としては大きいけども年寄りばっかです。どこもそうなってきとるけども、まだ百姓しとるとこは若いもんもおるけども、他は、おらんですね。隣の西海もね、漁でものすごい今盛んになっとるんですよ。漁ができて景気がいいみたいなんやけども、若いもんが漁業を継いどらんのですよ。今は、都会からやって来て漁業やっとる。そんな時代になってきとるもんで、漁業はちょっと難しくなってきていますけどね。

私はね、友達が船員で面白い話をするので、外国に憧れて若い教員のときに外国へ行ってきたわけよ。一番初めはソビエト連邦共和国のねロシアの方へ行ってきた。中西陽一さんが知事の時に友人と一緒に行って来たんですけども、ヨーロッパも何カ国も行ってきたし、文科省の教育施設団としても２週間ほどで行ってきた。ドイツとかフランス、ハンガリーも行ったし、それからオーストリアとかね。西ドイツ、アメリカ合衆国のハワイとかいろんなところ行ったんですよ。

そんなところへ行って帰ると、やっぱし赤崎はいいなって感じです。やっぱ思いますよね。懐かしいちゅうか、生まれたところというかね。若いときには分からんのやけれども、だんだんここの良さがまた分かってくるね。向こうも綺麗な場所やら一杯あって良いんですよ。良いげんけども、帰ってくると「あぁやっぱりここもいいな」っちゅうか、地元のことが分かってきますね。住んどるさかいここしか無いんちゃうかなって思いますしね。私はここで生まれてから仕方なしにここに住んでいますけども、皆もそうでないかね、自分の生まれたところに住んどるからね。

［取材日：平成 26 年８月８日・10 月 19 日］

PROFILE

本多　達郎 ほんだ　たつろう

昭和 13 年５月５日・76 歳
「富来観光ガイドの会・又次」の会長

現在、志賀町赤崎に夫婦２人で住んでいる。他の場所に長男と娘夫婦と孫が１人いる。生まれてから赤崎の地で生活してきた。昔は夫婦ともに教員をしていた。退職してから、自然の眺めが清らかで美しく、歴史ある富来の地を多くの人々に知ってもらおうと「富来観光ガイドの会・又次」の会長をしている。

本多さん手作りの沢山のお面（左：入口）と蛙（右：玄関前）

● 取材を終えての感想 ●

私は「聞き書き」という言葉を聞くことも、実際に体験するのも初めてで不安と緊張ばかりでした。取材させていただいた本多さんご夫妻は実に優しく接してくれたので大変感謝しています。何を質問していいか分からずあたふたしている私たちに、「何でも聞きたいこと質問してくれればいいからね。何かあるけ？」と、優しく言ってもらいました。また、写真を撮るために集落を歩いていると地域の方々が気軽に挨拶してくれたり、話しかけてくれました。赤崎の方々の優しさがとても感じられました。

赤崎の昔あった出来事や現在について本多さんの話を聞いて、初めて知ることがたくさんでとても勉強になりました。今回の取材を通じて、能登の素晴らしさや、人々の温かさを知ることができました。このレポートを見て能登の存在を知り、たくさんの人に魅力的なところをもっと知って欲しいと思っています。

（今江つゆみ　写真：左）

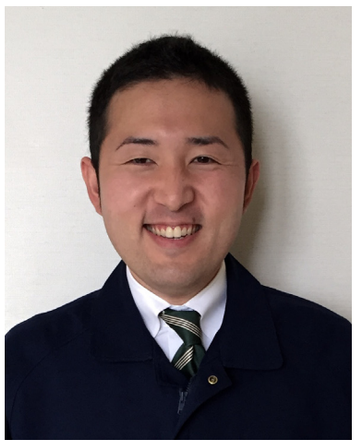
私は書き起こしやレポート作りがこんなに大変なものだと「聞き書き」を体験してから気付きました。でも、同時にたくさんのことを学ぶことときました。「聞き書き」研修会の合宿では、最初何をどうすればいいか分からず不安だったけど、それは自分だけではなく皆も同じだと知りました。この研修を通じて意見を発表することや人と接すること大切さを学びました。

赤崎地区を取材して、どの家も道路沿い、海岸に向かって同じような造りになっていることに気が付きました。私たちが道路から見る赤崎の街並みは、納屋や蔵だったのです。本多さんに赤崎を案内してもらうと、私が住む高浜の街並みとは違い、どこか昔にタイムスリップした感じがしたのはこのためでした。納屋や蔵を前にして風除けとし、住宅は後ろに、しかも住宅の玄関は海岸に対してわざわざ真横に向けて造ってあります。「赤崎の冬は尋常ではない」とおっしゃった言葉の意味が良く分かりました。改めて赤崎の人々の知恵の深さに驚きました。本多邸では、入口から本多さん手作りのたくさんのお面や蛙の置物が私たちを出迎えてくれました。蛙は鳥獣戯画図を参考に作られたそうですがどれも人間味があり親しみを感じました。本多さんから赤崎の街並みについて丁寧に詳しく教えていただくにつけ、住んでいる人々がとても優しく良いところなんだと実感しました。

（山科佳奈子　写真：右）

「本物」に触れること。受け継ぐこと。

脊戸　大樹



今から７年前、当時高校２年生だった私は進路を決める直前でした。私は幼いころから能登の祖父母の家に遊びに行く機会が多く、山や海で過ごしてきたことから能登の自然がとても身近な存在でした。その影響もあり、高校卒業後は環境問題について大学で学びたいと漠然と考えていたのです。そんな時、私の人生の大きな節目となる聞き書きとの出会いがありました。

私が取材をさせていただいた名人は樵（きこり）で、直径100㎝以上の大径木伐採を得意とする方でした。当時の私は、林業に関する知識が少なかったため、聞くこと見ることすべてが新鮮に感じられました。名人の子供時代の話に始まり、昔の道具や使い方、木の切り方など初めて知る多くのことを教えてもらいました。中でも、実際に仕事現場に連れて行ってもらい、目の前で木の伐採を見せてもらった経験は今でも忘れることができません。名人の言葉で、「樵名人やさけ失敗出来んとか思っとったら、絶対に山はつとまらん。そんなもん頭に置いたら駄目やわ」という一言がとても印象的でした。樵は長年の経験をもってそこにある一本の木と向き合う。名人の仕事に対する直向きな思いがひしひしと伝わってきました。この体験が今の私の何事に対しても「本物」に触れてみたいと考える原点となったのです。

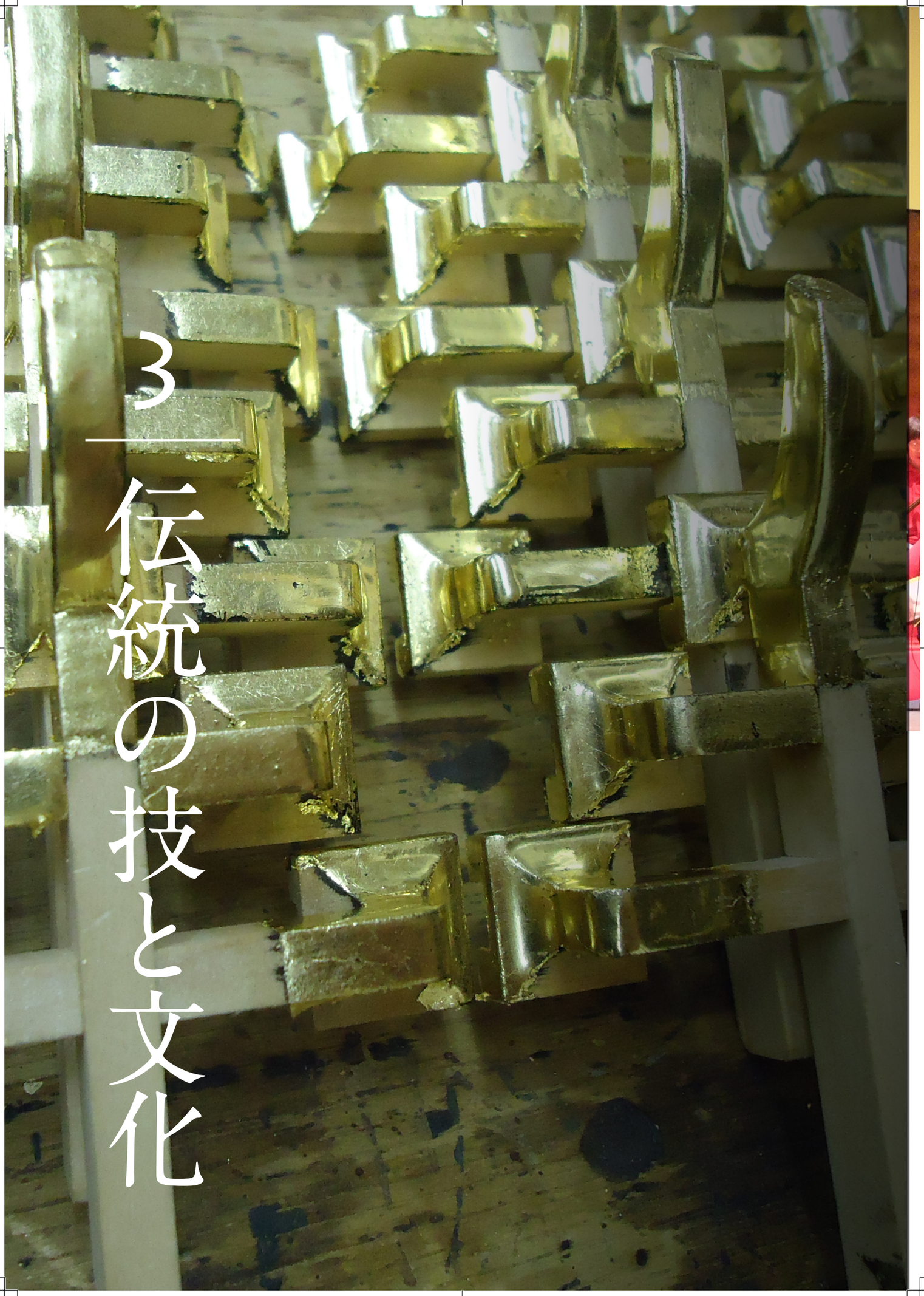
名人との出会いを通して、私は一次産業に対して強い関心を持つようになりました。販売価格の下落による手取りの減少、重労働が多いというイメージで担い手がいないという一次産業共通の課題、この現実を知ったとき、将来は石川県の一次産業を支える仕事がしたいという思いが芽生えたのです。この思いの強さがあったことで、私は大学を卒業後、石川県に戻り、青果物を販売する仕事に就きました。作物の生育状況を確認する現地巡回から選別指導、販売とまさに「本物」に触れられる現場で働かせてもらっています。大好きな地元の食材を一人でも多くの人に食べてもらい、「美味しい」と言ってもらいたい。そして何より、まごころを込めて青果物を作る生産者の思いが詰まった「本物」を消費者に届けたい。そんな志を胸に日々の仕事に臨んでいます。

聞き書きを経験したことで、もう一つ気づいたことがあります。それは受け継ぐことの大切さです。私の祖父は漁師だったこともあり、家の料理には魚を使ったものが今でも数多くあります。イカのゴロ炊きやサバの茶漬け、こんかいわし、棒鱈、イカの塩辛など数えきれないほどです。作り方を教わらなければ家の味は途絶えてしまいます。私は代々受け継がれてきた味のバトンを継いでいきたいと考えるようになりました。何気ない普段の生活にも受け継いでいかなければならないことがたくさんあったのです。そんな大切なことに気づくことができたのも聞き書きと出会えたからなのです。

皆さんの身近な暮らしの中にも、受け継いでいかなければ無くなってしまうものがきっとあるはずです。聞き書きとの出会いをきっかけに、それに気づいてもらえれば嬉しいです。

脊戸　大樹（せと・ひろき　全国農業協同組合石川県本部　職員）

1991年1月15日生まれ。聞き書き甲子園6期生。2013年3月東京農業大学地域環境科学部生産環境工学科卒業。全国農業協同組合石川県本部にて園芸集荷販売業務、流通指導業務を担当



3 伝統の技と文化

里唄
―七尾まだらを伝承する―

長　憲二
聞き手・石渡陽子　上野奏笑　岡田紀笑（石川県立七尾高等学校１年）

三味線を使って演奏している風景

自己紹介

僕は、長憲二（ちょうけんじ）です。誕生日は昭和 14 年 10 月 5 日の 74 歳。家族構成は家内睦子、長男が峰久（みねひさ）、二男が恭邦（やすくに）、長女は満美（まみ）の 5 人家族。

18 歳の頃からまだらに携わってきて、高校卒業してから地区の公民館の役員をしていた。それから、製菓衛生士という資格を取って 25、26 歳の時にお菓子製造をやっていて、結婚をしたのが 27 歳の時で、31 歳まで製菓衛生士をやっていた。31 歳から市会議員、42 歳の時に石川県の県会議員になった。その現職の間ですね、47 歳の時から 68 歳か 69 歳まで七尾市の体育協会会長をしていました。

今の、この七尾まだらの会長というのは、36 歳の時に、まだらの保存会の会員になって、54 歳の時に会長に就いて今年で 20 年になります。

七尾まだらとは

七尾まだらとはね、祝い唄なんですよ。ご祝儀の時の唄だとか、お祭りだとか、そういう時、唄われる唄がまだらなんですよ。それから、地域にとってはシンボル的な唄ですよ。また、和倉温泉の加賀屋なんかでは、お客さんが宴会をする前にショーとして七尾まだらを披露しています。だから、もてなしの唄でもあるわけですね。また、使っている楽器は三味線と尺八です。使う楽器の数は特に決まっていません。

七尾まだらの特徴

七尾まだらの歌詞はね、「めでためでたの若松様よ、枝も栄える葉も茂る」たったこれだけの歌詞なんですよ。そして、まだら始めてから終わるまで 4 分 10 秒の間に手拍子 77 回叩くんです。七尾まだらっちゅうのは、歌詞はものすごく短

（左）七尾まだら音頭を踊っている様子（加賀屋一人一芸会）
（上）保存伝承師の資格を持つ団体の舞台
（下）魚町のでか山保存会舞台

い、たったこれだけのセリフなんだけど、母音を長々と引っ張って唄うのが特徴なんです。踊りの方ではなく、短い歌詞を引っ張って唄うという特質があるもんだから、石川県の無形文化財の指定を受けとるんです。

歌詞の意味

七尾まだらの歌詞の「めでためでたの若松様よ、枝も栄える葉も茂る」というのは、鉢に山から採ってきた苗木の松を植えて水をやり、土を肥やして、成長してくる枝ぶりのいい枝に松の葉が茂る。これは、枝ぶりも葉の勢いも成長して、立派に育てられた松が、人間にも例えられるというわけです。みんなの気持ちが込められとるもんです。

七尾まだらの歴史

まだらというのは、仏教の曼荼羅（まんだら）からきたんではないかという説もあります。それから佐賀県の五島列島の馬渡島からきたんではないかという説もありますけど、定かではないですね。由来は。昔は陸上交通が大変な時代だったから、海上交通でしょ。海の神山の神というて海上交通の安全であったり、魚が大漁に捕れますようにと、海の神様にお願いする。それで、船乗りたちが、荒れた日に港に停泊して休んでいた時に、海上交通の安全だとか祈願をして唄われたというのが、まだらではないかといわれている。さらに、舟おこしと言って、旧暦の２月 11 日に漁師の人たちが初めて船を出して漁にでたり、荷役作業をしたりすることをいう、そういうときも、安全祈願や大漁を期待しながら、まだら節を唄ったといわれておるわけやね。

昔の七尾まだらは楽器なしで唄だけだったんです。近代になってから、尺八とか三味線とかを入れた。振り付けはそれぞれの地域の自由で、どんなものでもいいんです。ところが今はまだら節が文化財として指定を受けている以上、その楽器や振り付けを変えるわけにはいかん。ただ踊りというのは文化財に指定されとるわけじゃない。古来の伝統的な節まわしは大事にしなきゃならん。

まだらの日

今、能登には２つの「まだらの日」があるんです。

１つは、７月 18 日の「七尾港まつり」の日です。御祓川の河畔に七尾まだらの石碑ができて、今年で 52 年経つんです。そこで、一昨年の 50 年を境に、先輩方の皆さんに「これが七尾で息づいている伝統芸能のまだらです。しっかりと保存して、普及・伝承のために頑張っていきます」という誓いを立てる。そんな日にしたんです。

もう１つは、年末 12 月 23 日の日に行う「千人が唄う能登の第九、まだら」です。これは、１年おきに踊りや唄などを練習している人達のまだらをおりまぜて大合唱しようというものです。１年を振り返り、みんなで新しい年を祝福して迎えようという意味をこめてやってるのがねらいです。

今、能登に２つの「まだらの日」ができて、能登の風物詩になるという捉え方をしとるんです。そういう大きな能登にとっての喜び、期待とするものをみんなでこれからの生活の中で力にしていこうとすることを表現できるまだらにしたいと思っているんです。

保存会の現状

七尾まだら保存会を後世に受け継いでいく人材を確保して育てていくというのも僕らの保存会の仕事だと思います。そんな人材確保のために保存伝承師制度を作って、2 年に 1 回ずつテストしとるがですよ。このテストで、まだらが好きな人、やってみようと思っている人、挑戦をしてくださいよと言っとるんです。

この 6 年間の間に、個人 233 名、団体 7 つの方々、つまり 240 人位の人達に保存伝承師という称号を与えてきとるんですよ。どんな人が受験できるのか、どんな人に与えられるのかというと、唄において踊りにおいてその能力や歌唱力に衝撃を受けるとか、一定の技量を持たなきゃならないこと。過去 3 年間にやっぱり人の前というか、年に 3 回や 4 回かは舞台を経験してきたかどうか、そしてこれから将来にわたって継続性を持って活動できる可能性のある人かということで受験させとるんです。保存伝承師の資格を取れば、一応、指導者になれるし、自覚を持ってやってもらえるので、将来に向かって保存と普及のために役立つ。

保存伝承師の 233 名の方々の平均年齢は 50 歳以上の年の人が 6 割位になるかな。若い人で受けにくるのはなかなかおらんわいね。この会を存続させていくときには、若い世代、中間層の世代を入れて、場合によっては女の人を入れる。これからの課題は保存会の中の青年部、保存会の中の女性部として、組織の在り方を変えていかないと駄目なことは間違いないわ。僕のとこの保存会のメンバーといったら 34、35 名しかいませんが、平均年齢は間違いなく 70 歳超えてますよ。今、最年長では 81 か 82 歳の人がおる。若い人ということになると 40 歳くらいかな。

この保存会ができて 90 年の長い歴史の中で、型破りなことをしてはいかんというのが先輩の教えやったけど、僕は伝統的な古めかしいまだらを皆さんにいつまでもさらに愛し続けられ、市民の皆さんに世代を超えて近づいてもらうためには、もっと理解しやすいまだらというものをつくってもいいんじゃないかと思って「まだら音頭」というものを 3 年前につくったんだ。それに、来年が七尾まだら保存会ができて 90 周年になるんです。その 90 周年を目標にして 1 つの節目をみんなで祝いたいということで、まだらのゆるキャラをこしらえたということです。

七尾まだらのゆるキャラ七尾君（右）とまだらさん（左）

保存会の歴史

最初は、地区の公民館の役員をしていたので、その時に「青の芽会」という青年団を若い連中ばかりでつくった。時として、地区の青年団として対外的なことをやってくれと言われたことがあった。その時、石川県の会報をつくるコンクールで優勝した。そんなことがあって、地区の何かに取り組もうということになった。それで、まだらに取り組むことになった。

しばらくして、まだらの発表大会にいっぺん出演してくれんかという依頼があった。この際やから、七尾まだらの小丸山会という名前で出演させてもらった。それがきっかけで七尾まだらの若手が取り組む小丸山会というものを 20 歳の時つくった。今思えばまだらをして 55 年ほど経っている。

本体の七尾まだら保存会の会長さんが亡くなって、そのときに小丸山会と、もう 1 つの愛好会と七尾まだら保存会の 3 つが一緒になって保存会の本体をしっかり立て直そうということになったんです。そして僕が合併した七尾まだら保存会の会長になり、今に至ります。

長さんの思う魅力

まだらっていうのは、1 人の音頭取りによって何十人、何百人もの人達が大合唱できるっていう 1 つの心の和を実感できる。まだらっていうのは、1 人の音頭取りによって大勢で歌われるわけなので、合唱が強ければ強いほど舞台はいきるんです。

僕が目指すまだらの一体化

僕の目指しているということとなると、正調の唄と踊りについて確立することかな。まだら節そのものは基本的には変えませんよ。だけど、踊りはいろいろなグループのオリジナルをどうぞとゆうとるわけです。それで、七尾まだらを小学校や保育所へ教えにいっとるんですけれど、東と西で教えるグループの人が違うんで、みんな自分らのグループの好きな形で教えてくるわけですから、東と西で踊っとる子供らに微妙な違いがありますね、と他の人達に言われるわけや。それはいかがなものかと思ったものだから、正調といわれるまだ

ら節とか踊りのスタイルを DVD を作って本当のまだらの姿はここにありますよと、統一された正調のまだらをこしらえておかないと説得力がないからこしらえました。

一本化するまでの道のり・苦労

正調というものを作り上げることは大変やった。芸事というのはみんなそれぞれに主張があって、指導者達にこだわりがあって、なかなか一本化された踊りがなかったんです。でも、いつまでたってもつくらなかったら駄目だなと。だから、なんとかして 6 年前に正調というものをこしらえた。それのための話し合いは本当にいさかいごとでした。それだけ正調のまだらをつくるには、お互いに妥協しながらつくる必要性があった。それに、時間のかかることやったけど、なしえてよかったな。

また、芸能の社会というのはうっさいもんで、いろんなグループがあって、私らの方が正調なんやというもんがおるんやけど、そうゆう人達が踊っとるのと DVD のと比べると違うんです。だから、正調とは簡単に言わせんがです。あくまで DVD に入っとるのをきちんと生き写ししたものでなければ言わせない。芸事というのは、自分こそはというのは、みんなもっとるんだよ。だから、正調というものを他のグループに心掛けさせないと、オリジナルと混同してしまうので、一本化されたまだらを確立することに僕は腐心したというのかな。僕が言うようなきちんとした正調が七尾にあるということについては、どのグループも認めた感じがする。そういう意味では、長い間の懸念であった正調のまだらの唄と踊りを確立できたことが、一つ僕の仕事やったなと思いますね。

地域の垣根を越えて

今年の 2 月にね、中部と近畿の 12 県からフォークダンスの指導者クラスの人が 220 名ほど集まって、七尾まだらの勉強会をすることになったんです。

それで、大阪に集まって講習会をしました。そんなことがきっかけになって七尾まだらがさらに中部圏や近畿圏に飛び火して発展して広まっていく機会になればなと思っとれん。

そういうことで、ここの地域にとどまるまだらにしておきたくないので、地域の垣根を越えて七尾まだらを発信できるということが大きな目的であったわけです。

「里唄」

まだらに取り組むってことは、故郷を大事にする心につながるわね。具体的にね、みんなで声を出し合って喜びのおたけびや大合唱ができるというのはね、心温まるもんですよ。友情、絆……そんなものが、本当にほのぼのとしたものを感じるな。まだらをやってる人たちとのお付き合いはね、本当に壊れないしね、長いですね。取り組んでくれれば、まだらを通じて永遠の友達になれると思うな。それに故郷を大事にする心につながるしね。それをまた仲間と一緒に打ち合わせることができるんや。とにかく、まだらに純粋に取り組んでほしい。

いっぺん七尾で、全国のまだら節がある地域の皆さん方が寄って、まだら節のサミットというか、全国会議というか、そんなものをして皆さんと集まれればなと思とるんです。そうするとまだら節を通じて能登観光にも役立つやろしね。全国発信して、地域を超えて、まだらが広がっていくことをそういう意味では僕は期待しているんです。

里山里海が今年のメインタイトルや。僕は市役所にも輪島まだらのほうにも呼びかけとるんやけど、里山里海「里唄」に七尾まだらが名づけられないかと。大きなテーマですよ。まだらというのは、地域になじんだ民謡です。本当は海や山に続いて能登には里唄もあるということにすると、もっともっとこの能登というものが美しい海、豊かな山に続いて、味わいのある地域になじんだ唄もありますよ、ということになればいいなと思っている。だから僕は今から堂々と「里唄」っていうことを言っていきたいと思っています。

〔取材日：2014 年 8 月 8 日・8 月 19 日〕

PROFILE

長　憲二　ちょう　けんじ

昭和 14 年 10 月 5 日・75 歳
七尾まだら保存会会長

18 歳の頃から七尾まだらに携わり、同年に青の芽会を発足。昭和 46 年に合併して「七尾まだら保存会」を結成する。平成 8 年に七尾まだら保存会会長に就任した。現在は七尾まだらを後世に伝承するために、イベントを行うなどの活動を行っている。

● 取材を終えての感想 ●

「聞き書き」というものを一言で表すと「大変」という言葉に尽きます。

なぜなら最初、先生からこのお話をもらったとき、「面白そうだなあ～」と、そう思っただけでした。ですが、実際にやってみて、「えっ！？こんなに大変なの！！？」と衝撃を受けたからです。特に、録音してある声を文字に変えるという作業が一番辛かったです。

しかし、今はこの「聞き書き」をしてよかったと思っています。それはなぜかというと、怠け癖があった自分の精神を叩き直すことができたからです。

私たちは、七尾の風物詩でもある「七尾まだら」について調べたのですが、私は七尾に住んではいないので「何じゃそりゃ？」という感じでした。なので、最初は何も知らないので「怒られないかな？」と、とても不安で仕方ありませんでした。だけど､生の声を聞いたり実際に見たりしているうちに｢七尾まだら」への熱心な想いが伝わってきて、「これは全国に知ってもらう必要がある！」という気持ちに変わっていました。

最後に、「聞き書き」は大変だったけど人の想いを多くの方々に伝えようと頑張ってきたことを誇りに思っています。（石渡陽子　写真：右）

「聞き書き」という経験は、自分にとって初めてのことでした。取材に行く前は聞いたことをまとめて書けばいいだろう、という軽い気持ちでした。しかし、取材をして、長さんの思いやまだらを伝えていきたいという強い意志を感じ、軽い気持ちだった自分を恥ずかしく思いました。長さんの思いや意志を自分たちが文章にし全国の人々に発信する。そのことがどれだけ大変で大切なことかを感じました。

１回目の取材は思った通りに上手にすることができませんでした。あまりしゃべることが出来ず、長さんに迷惑をかけてしまったと思います。だけどそんな自分たちに長さんはフランクに、優しく接してくださいました。とてもありがたかったです。それと同時に取材することの難しさも感じました。

長さんにお話を伺って、たくさんのことを学べました。その中でも伝統をいつまでも忘れず後世に伝えていくことの大切さが身に染みました。そのことを心に刻んでいきたいです。（上野奏笑　写真：左）

私は聞き書きをするにあたって、先生からいただいた冊子を見たとき、自分もこれを作ることができるのかと不安を抱きましたが、講習会に参加して名人と話していくうちに、人々に昔の伝統芸能を残す大切さに気付きました。他にも、七尾まだらについて多くのことを知り、たくさんのことを学ばせてくれる良い機会となりました。

私が、聞き書きレポートを制作するとき、最も大変だった作業は、書き起こしでした。何度も何度も同じ話を再生したり、漢字が分からないときには辞書で探したりなど、とてもつらい作業でした。しかし、やり終えたときには言葉が出ないくらいの達成感を感じ、やり遂げて良かったなと思いました。

今回の研修は、私にとって新たな出会いとなりました。この活動を通して学んだことを、これからも大切にしていきたいと思います。最後に、共存の森ネットワークの皆さん、長さん、先生、石渡さん、上野さん、本当にありがとうございました。（岡田紀笑　写真：中央右）

素になれる場所
―幸せを求めて―

布　辰巳
聞き手・権左彩夏　西東夏海
（石川県立田鶴浜高等学校１年）

生まれたときから後継ぎ

布辰巳、昭和 16 年４月 23 日生まれ。家族構成はわたし（73）と家内（67）と息子（41）の３人です。

子供の時は、勉強ちゅうより外で遊んどった。石蹴り、かくれんぼ、おにごっこ、それから小学校の時は相撲、夏になれば水泳、夏休みになったら、毎日みたいにふんどしで海へ行っとった。近かったから。

子供の時から、ここ継ぐちゅう意識が強かったから特別夢はなかった。中学校入ったときにもう、「親から継ぐんやぞ！」って言われとって、高校入って卒業したら確実にもう後継ぎと決まっとった。だから手伝いも含めて高校１年ぐらいの時からやっとるからもう 57 年。手伝いは簡単なことからしとったね。

丈夫な七尾仏壇

先ず、仏壇の木地は能登の地材を使っているっていうのが前提です。今は部分によっては他のものも使うけどね。仏壇の後ろの板は、他の産地は１枚なんですけど、七尾仏壇は２枚の二重鏡板。２枚っていうのは構造的に後ろ全体を支える板が１枚あって、その前に１枚の板をすこーし湾曲させて膨らんどる様な形にして合わせてある。中央・右・左とそれぞれ３枚を後ろ板に並べて重ねて配置するわけ。一般的には１枚の板を後ろの仕事、前から見える部分は前の仕事をするっちゅう１枚の板で作ってある。現物見れば分かりやすいけど、ややこして分からんね。七尾の仏壇はそこがダブルの２枚になっとるわけ。だから構造的に丈夫なんです。

木地の部材が直角に交わる部分が貫通して組み合わさっている、これがほぞ組みです。他の産地もある程度なっとるけど、七尾仏壇はよりがっちりなっとるんです。これが強度を高める構造になっとるわけ。七尾仏壇の台は、他の産地と

骨組みから違って桟などの部材もちょっと厚い。いろんな細かいとこでも、他の産地からみるとやや厚くて頑丈やなあ。全部強度のためです。

気持ちの拠り所

自分にとっては、毎日拝んどるから、やっぱりそうやなぁ気持ちの拠せ所というか、必要で大切やと思う。やっぱりこの世に生まれたことに対して感謝、「ありがとう」って。自分はこうして一人で生きとるんじゃなくて、皆さんのおかげで生きとられる。みなさんのお陰さんでこうしておられるという思いやね。生まれるっていうのはものすごいことで、ほんとに希なことや。そういうこと思うと、自分の命は大切にしていかんなんってことやな。そんで、素直に考えると神さん、仏さんの命が宿ってわたしやあなた方が生まれた。人が何か無限の力というか、何かに対し頼りたい拝みたい気持ちになった時、仏さんを作ったり、絵にかいたり、彫刻で作ったり、色々な祈りなり感謝なり思い続ける、思いを託す対象としての偶像を造って、そこに神がいるって信じて自分の時間になるとそこでお祈りする。何も無くても拝むことはできるけど、やっぱり見える形があると小さな子どもにでも、「感謝しようね」「ご挨拶しようね」って言いやすいし気持ちをあらわしやすいと思う。そんな意味でも仏壇は偶像を安置する場所としての一つの形じゃないかなとわたしは思う。

無くなりつつある当たり前

この辺の田舎の家は昔から家に仏壇があるのが当たり前やった。特にこの北陸ってところは真宗大国って言われてて、浄土真宗の教えが広く伝わっている。だからお寺との関わりも深くて多くの家に仏壇がある。おじいちゃんおばあちゃんと一緒に、朝晩お参りをするという時代があって、

（左上）能登のヒバとアテで作る仏壇の後ろ側。強固にほぞ組が作られている。
（左下）正面から見た二重鏡板。中央・右・左とそれぞれ緩やかに湾曲している。別々に作られ、配置されている。
（右上・右）丈夫でありながら、繊細な彫刻や豪華な金箔が施されている。（200 代の仏壇）

生活の中では当たり前やった。今は、その当たり前がなくなってきている。だからどうっていうこともないかもしれないけど。生活に不便はないし。だけど、何かが足りなくなってきているんじゃないかなっていう気はするんです。家の中に仏壇があるとそういう気持ち、感謝する気持ちを伝えていきやすい。どんな人でも必ず死はあるし。歳を重ねて衰えていくと人によって信仰っていうものが出てくるんじゃないかな。若い時はなんていっても怪我してでもすぐ治るみたいもんで、でも歳いくと何もかも衰えていく、治り方も遅いし、そうすると神仏さんに助けちゅうもんをどっかこっかで求めるんじゃないかなと思う。

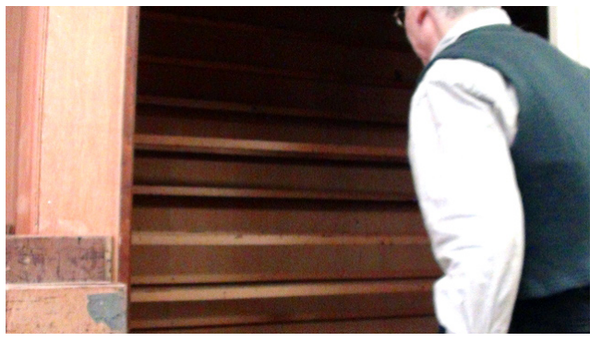
七尾仏壇製作の特徴

七尾の仏壇は基本的に５人の職人さんが必要なんです。まず木地師や。一度木地の状態でここ塗師屋に来る。そして、彫刻の木取りを彫刻屋さんへ出す。それから金具師さんに金具の寸法を取ってもらう。幅とか長さの寸法や。塗師屋が、仏壇ばらして（解体）下地をする。下地とは砥の粉と膠を合わしたもの。平たい板状の部分は堅地と言って、地の粉や漆を使うけどね。膠って、ようはゼラチン。膠は日本画書くときにも使ったり、食用のゼラチンだったり。その膠を混ぜたもので下地を付けて行く。部品によっては２、３回付けて、水を付けて、砥石で研いて平らにして柿渋を塗る。柿渋は青い柿を腐らせて作ったもの。上澄みは強烈な匂いがするけど良質の天然防腐剤で、大工さんが家を建てる時に柱に漆を塗る下地によく柿渋を防腐剤として使ったんや。赤っぽい色をした柱は弁柄塗るんやけど、その場合も防腐剤として柿渋を使うんや。天然材料ですごく重宝してたけど、そういう天然材料もだんだん少なくなってきた。需要が少なくなってきたんやね。下地付けの後は中塗り工程を場合によっては数回重ねる。それから上塗り。漆は湿気乾燥といって、温度と湿度が高いとよく乾き、低いと乾かない。塗ったものを乾かす所をフロと言ってね、そのフロの湿度調整がその日の外気によって違うのでうまくいかんで、若い時ゃよう失敗したけどね。そして金箔押し。その先に、絵を付ける部分は塗りあがったら、蒔絵師さんに出す。それぞれの職人さんから上がって来たものを全て集めて組み上げて塗師屋が完成させる。だからとても時間（日数）がかかるんや。

完成までの期間

今、木地から１本の仏壇を１人でやるとしたら半年ぐらいかな。大きさにもよるけど。とにかく木地が出来てこないと仕事が進まないから。木地だけで普通は１ヶ月。その木地が出来てからあとは同時進行でやるんや。蒔絵師さんは塗り上がらないと描けないので、絵を付ける部分の塗りを先に仕上げる。金具屋さんと彫刻屋さんは、木地ができた時点で同時進行する。最速で完成するまでにやっぱり半年ほどかな。一番時間のかかる仕事は屋根の部分や。職人さんでいったら、木地屋さんと塗師屋が時間かかる。

しかし、一般的な工程よりももっと丈夫にするとか華麗にするとか、条件が難しくなるとそれだけまた時間もかかる。１つの仏壇を仕上げるのには半年間毎日その仏壇のことに携わっている訳ではなくて、たとえば乾かす時間とか寝かす時間ってゆうのも含めてや。だから毎日どっかは触ってるけど、一日中その１本に携わっているという訳ではない。いくつかの別の仕事を間に入れながら進めていく、ということやな。



（上）砥の粉と膠を合わせた下地。この後に漆を塗り、金箔を施す。
（中）漆
（下）漆を温度と湿度で乾かすフロ

仏壇製作の昔と今

一番需要のあった時は、昭和 40 年から 50 年代かな。３

日に１度ぐらいの頻度で納品しとった期間もあった。今は昔と下地のやり方も原材料も違うし、中塗りは１度だったのを２度するし、金箔も最上級のものを使ってるけど、そのころはもう少し純度の低いものを使っとった。正面から見える所だけ金箔使って、見えない所は、真鍮（しんちゅう）の箔を使うということもやっとった。そんな期間が何年もあったと思う。真鍮の箔っていうのは、何年かすると変色してきて、10 年、20 年ぐらいすると金箔との境目がはっきり線になって見えてくる。時代が進むにつれて仏壇の素材も変化してきたからね。

200 代くらいの大きい仏壇では、金箔は３寸６分（約 11cm）角のものを代替 2500 枚くらい使うし、金箔押すまでの下地から上塗りまでの工程は、あの時代と比べると今はより手を掛けてて完成度が高いと思う。値段の違いもあるけどね。

仏壇製作に関わる職人

前にも言ったように、七尾仏壇製作には基本的に５人の職人が必要なんです。木地師・金具師・蒔絵師・彫刻師、そしてわれわれ塗師。七尾には「七尾仏壇協同組合」ちゅう組織があって、職人たちはその組合員になっとる。例えば、うちがお客さんから仏壇の製作を頼まれた場合、先ず木地の製作を木地屋（師）に発注する。組合にはそれぞれの職人さんが、今は少ななったけど、２人か３ずつおって、金具屋（師）はもう１人しかおらんけどね。それぞれの塗師屋（仏壇屋）は、だいたい木地は誰それ、金具は誰、彫刻は誰っていう風に、仕事を頼む職人が自然に決まっとる。だから金具屋のように１人しか職人がおらんと、仕事が混んで納期が遅れたりして困ることもあったりするんや。そうやって基本５人で１本が仕上がる。うちは塗師屋やから、みなさん（職人さん達）にお願いしたものを上がってきたらまとめて組み立てて、お客さんにお渡しするっていうのが仕事。

仏壇の大きさ

仏壇にはいろいろの大きさがあって、本尊軸のサイズを基本に「代」という単位で表されています。50 代とか、70 代とか。例えば 70 代の仏壇なら、70 代の御軸が３枚並んで掛かる幅の仏壇、ということになるんです。大きいものでは最近では造ることは少なくなって来たけど、田舎の大きな家にある一般的なサイズの「200 代」とかね。７、８サイズくらいはあるかね。ちなみに 200 代という御軸の幅は１尺（仕立てによって多少差がある）くらいで、七尾仏壇の 200 代の総幅は４尺１寸前後。（仏壇は今も尺・寸で表す）

今でも中島町とか、輪島の三井あたりでは 300 代の仏壇がかなり残っていますよ。今まで何本も塗り替えの仕事をさせてもらいました。塗り替えの作業工程も、解体洗いのあとは新品と同じ工程を踏みます。蒔絵などは良い状態であればそのまま残すし、各部材が傷んどれば、それぞれの職人さんに補習修理してもらいます。そうして塗り替えたものは新品にも増していい味の深みが出て、私は好きやね。

仏壇生産の昔と今

一番忙しかった昭和 40 年、50 年代には世の中の多くのものがそうやったように、我々の業界にも大手のメーカーが進出してきて、その産地に合わせて見た目は同じようだけど、漆は使わない、吹きつけ等の機械工程作業の安い商品が出回り出したんです。その頃は、ひと月に産地物（自店で製作）２割、既製品（メーカー物）８割くらいの納品やったと思う。作っとる暇がないくらいやから。昔は注文が無くても作っとった。弟子達もおったし、職人さんも大勢おったから。今じゃ考えられんことや。

能登沖地震以降からは、大きく情勢が変わった気がする。地震で傷んだ手持ちの仏壇を修理塗り替えする人ももちろん多いけど、大きいものを小さくするっちゅう人が多くなったね。新しくて大きいものはあまり出ない。特に家を建て替える人は生活の変化で、構造上小さい仏壇になってきたね。だから大きいのからだんだんちっちゃくなって、仏壇の需要もだんだん少なくなっている。今は、ちっちゃなものでもそんなに出ない。注文製作も以前よりは減っているし、見込み生産はほとんどしない。今は、新しいものより修理塗り替えの仕事の方が多いね。仏壇の修理は大きさにもよるけど、ゆっくり３ヶ月かかる。 今は仏壇だけでってゆうのは、営業としては難しいから。

昔、わたしが若い頃は休みの日は月２日しか無かったけど、今は若い衆（従業員）の働く日が月 20 日ほどやからね。わたしは毎日少しでも仕事場に入ってますよ。仕事無い方が辛いわ。

塗師屋

仕事は塗師屋なんで塗箔（漆を塗って金箔を押す仕事）するものはどんなものでも仕事としている。小さくても大きくても。例えば、小さい物はお椀とかお膳など、大きい物ではお神輿とか。この辺りの夏祭りの奉灯とか、お寺の本堂の中とか。本堂は仏壇を大きくしたような感じになっとる。ほんで柱もあって、ちょうどお寺をちっちゃくして箱にしたものが仏壇やね。だからお寺のご本尊が居るところとか、内陣を直接漆塗って金箔押したり、屋根の下の複雑な部分とか。宮殿（くうでん）って言うんやけどね。今はそっちのほうの割合がかなり占めとると思う。

（上）現在作業中の神輿のたる木　１本づつ丁寧に下地が塗られている。
（下）下地の上に漆が塗られる。

人としての大事な想い

仏壇離れっていうか、人間の考え方住まい方などが変わってきて、生活に仏壇の必要性を感じていないのだと思う。昔のように、じいちゃんばあちゃんと一緒に仏壇にお参りをするっちゅう風景はほとんど見られない。強制はできないけど、やっぱり一家の中にそういう大きな何かと自分が向き合う場所があるってゆうことはとても大事やと思う。仏教に限らずや。人間生きてることがどんなに希なことか、どんなに尊厳のあることかっていうことをやっぱりきちんと認識してないと、うまく言えんけど、今の世の中に起こっていることの意味が分からんのじゃないかな。そういう命に対する想いってゆうのが違ってくるんじゃないかなぁっていう気はしています。だから、「こういうものがあるから」とかだけではないと思うけど、家族がお盆に先祖のお墓参りに行くとか、正月にはみんな揃っておせち食べて、神社に行くとか、そうゆうことも含めて、人として生きるときに大事な部分ではないかとわたしは思うんです。そんな中の１つの形としてのお手伝いができるんじゃないかなぁって思っています。でもこれはやっぱりみんなそれぞれ思いがあって、昔の子供達と今は違うからね、わからんけど。ただ「神仏がおるか、おらんか」じゃなくて、「おる」って思ってる人が幸せやわ。わたしはそう思っとる。

七尾仏壇のこれから

今、七尾仏壇の職人さんは 70 人もおらん。組合員数が 32 人や。もちろん木地屋さんも金具屋さんも蒔絵師さんも彫刻屋さんも塗師屋さんも入れてや。この七尾の仏壇に関わった仕事をしている人の総数やから。塗師屋だけやったらそんなにおらんし。やめていったり、亡くなったり。後継ぎがいないからね。もう少し需要があれば仕事に携わる人も出てくるだろうけど。一度途絶えると伝えていくの難しいし、なんかさびしいね。

［取材日：2014 年 8 月 8 日・10 月 22 日］

PROFILE

布　辰巳　ぬの　たつみ

昭和 16 年 4 月 23 日・73 歳
七尾仏壇　漆塗部門伝統工芸士
有限会社 ぬのや仏壇店　代表取締役

昭和 35 年より仏壇作りに携わり、平成 7 年、平成 11 年の全国伝統的工芸仏壇仏具会長賞をはじめ、数々の受賞をしている。また、平成 23 年には伝統的工芸品産業功労者等経済産業大臣表彰も受賞している。仏壇作り一筋で七尾仏壇の伝統の継承に尽力している。

● 取材を終えての感想 ●

私は、参加するときすごく楽な気持ちで参加しました。でも、実際に取材では、あらかじめ用意していた質問がすぐに聞き終わってしまい、会話が何度もとぎれたりしました。書き起こしも、何と言っているか分からなくて何度も聞きなおしました。そして一番大変だったのは、書き起こしたものをまとめる作業でした。どうやって文にすればいいのか分からなくてすごく時間がかかりました。でも、同じペアの西東さんや先生と協力して最後までできました。

この「聞き書き」を通して、仏壇についての知識や能登の文化についても学ぶことができました。そして、文を書く力もついたと思います。この「聞き書き」は私にとってすごく貴重な時間になりました。参加してよかったです。貴重な時間を下さった布さんに感謝しています。ありがとうございました。（権左彩夏　写真：左）

今回「聞き書き」をして、初めは楽しそうだと思っていました。しかし、１回目の取材が終わってからの書き起こしの作業は正直思っていた以上につらかったです。専門用語がとても多く、分からない単語ばかりでした。１回目の取材の書き起こしが思っていた以上に長引いて、２回目の研修にみんなで集まったときに他の組がほとんど終わっていてあせりました。２回目の取材が遅くなってしまいましたが、ぎりぎり間に合ったので、ほっとしました。私は、加賀出身なので能登のことは最初全くと言っていいほど知りませんでした。しかし、今回能登の里山里海人に参加して、少しだけ能登のことが分かった気がしました。

今回取材させていただいた布さんは、とても優しくて、私たちに分かりやすく教えてくださいました。里山里海人だけではなく、人生の先輩として、たくさんのことを教えてくださいました。これは布さんをはじめ、たくさんの人に協力してもらって出来た作品だと思います。感謝しています。ありがとうございました。

（西東夏海　写真：右）

子供たちのために
―アマメハギを続ける―

番場　政晴
聞き手・河渕理乃　古川真菜（石川県立門前高等学校１年）

今の生活

私、皆月日吉神社の宮司をしております、番場政晴です。年齢は今年 77 になります。皆月には、生まれた時からずっとおります。私の子供は男２人です。現在、私と女房、それから跡継ぎの長男と嫁さんとが一緒に生活しております。次男は、東京の方に行っております。孫は女３人です。

アマメハギの様子
2010 年１月３日　北國新聞　撮れたてニュースより

子供の経験＝良い経験

私の場合、母親が亡くなったのは私が小学校４年生の時で、父親が、私が中学生の時に病気で倒れて、自分で動けんがになった。姉が結婚しておらんかったから、父親の看病を１人でやっとった。父親が動けんから、おんぶしてトイレに連れてったり、それがだんだんできんくなると、床に便をする。おしっこも大便も、全部。それも全部、自分が始末をしました。誰もしてくれるもんがいないもんでね。ほいて、父親が「バナナ食いたい」って言ったら、お金を持ってバナナを買いに行きました。後は、父親にご飯を食べさせたりもしとったわ。そういう父親との生活を大体３年ほどしました。ほいて、父親は私が 21 の時に亡くなりました。でも、子供の時の経験は良い経験をしたぐらいのことしか思いませんでしたね。苦しいっては一つも思わなかったですね。

決意をした時

「宮司さんになろ」思たんは、父親が病気で動けんがになった時ですかね。「やっぱ、早く家へ帰って、家の後を継がにゃいかんな」ということで、腹をくくったわ。やから、高校出たら熱田神宮っちゅう、そういう宮司さんの養成所があったんで、そこへ１年間だけ行った。そこを出て父親が亡くなる前に引き継ぎをして宮司になってん。

「赤い模様をはぐぞ！」

まず、アマメっていうのはね、囲炉裏の火に当たると足にできる、赤い模様のことねん。それは、寒がりでなまくらで勉強せにゃお手伝いの仕事もせん。何もせんと火に当たってばっかおる。するとアマメばっかできる。子供がなまくら者になってアマメばっかできるのは、親としては困る。やから、アマメ様が出て来て、「そのアマメをノミとカナヅチでトントントンして、アマメをはぐぞ、アマメを無くすぞ、そんねしてもいいんか？」という、なまくら者を無くせる行事になっとる。

怖いもんやけど、子供達のために……

アマメ様が正月に、１月２日の晩の日にうちを訪問する。そん時に「アマメ様ござった。餅３つでーとけや」って周りのもんがはやす。アマメ様は「元気に頑張っとるか？」っちゅうことで、１軒１軒のうちを回る。堂々と入って行きますね。どこのうちでも。その時は、家上がって神棚の前へ行く時までは、誰が何を言おうが堂々といばって入って行きますね。後は、子供が家ん中に隠れとったら必ず見つけ出すね。見つけ出してちゃんと脅す。ほして、アマメ様の言うことに対して子供にちゃんと返事してもらうんよ。それは、悪いことに遭わないように、うちの中を平和に、家庭を守る、そういうためにするんや。

それと、なまくら者を無くす。みんな一生懸命に仕事をする。勉強をする。ちゃんとそういう育て方、風習を作るために、「ちゃんと親の言うこと聞くか？　学校の先生の言うこと聞くか？　しっかり勉強すっか？　良いこととわりいことを区別しなさいよ」っちゅう風にして、脅しをかけます。ほしたら、子供が「アマメ様、言うこと聞きます。頑張ります」っちゅうから、アマメ様が「よし。これからちゃんと頑張ってやらにゃ」って頭をさする。ほいて「ありがとうございます」の感謝の気持ちを込めてアマメ様に餅を３つ渡す。そういう行事なんよ。

こういう風に持って音を出す

泣き叫ぶ子供達

子供達は、びっくり仰天で泣きますし「アマメ様の言うこと聞きます」っちゅうて叫びます。中には、アマメ様が来たらみんな一生懸命に家ん中を走って行って、押し入れやトイレに隠れたり、家から出て他の家へ逃げてくもんもおりました。アマメハギは子供がちゃんと「言うこと聞きます。頑張ります」っちゅう返事をするまでアマメ様が子供を脅すのが特徴になるんやと思う。でも、アマメハギはわりいことを目標してやるんじゃ無く、良いことを目標にしてやる。脅すだけの行事やって見えるかもしれんけども、なんでもかんでも脅しとるように見えるかもしらんけども、ほんとは脅かしながら、なまくらな子供は駄目だよ、勉強もせんとって遊んで歩くような子供じゃあ駄目だよっちゅうことを子供に聞かせとる。ちゃんと子供に言うことを聞かせるのが目的ということですね。アマメハギは子供達に「健康に頑張れよ。勉強もちゃんとしなさいよ。親の言うことも聞きなさい」っちゅう日常一番大切にしとるね、子供が一番覚えなあかん、そういう言葉を色々面様が言うとるんよ。

特別な思い出

私自身、一つだけとても印象に残ったものがありますね。それは、和倉温泉の方から「和倉温泉で頼む、してもらえんか」って言われたんですよ。それで和倉温泉加賀屋へ行きましたね。ほいで、アマメハギの正月の日に、アマメ様の格好をして各部屋を回りました。わあわあ騒いで楽しくやりまし

（上）上：猿面　左右：ガチャ面
（左）左から：カナヅチ・ノミ・カナヅチ・セリコギ
（右上）お餅を入れるための袋
（右下）猿面様がお祓いをするために持つ

たよ。それがいい思い出ですね。そういう一つの余興としてアマメハギをして、みんなを脅かしましたね。

面の種類

アマメハギは４人で回ります。各家々のお祓いをする天狗様、「ア」と「ウ」の口をした雄雌一対のガチャ面様、皆月日吉神社の使いの猿面様がおります。家庭の子供達がちゃんと育つように教えるのがアマメ様の役目なんですよ。

道具の意味

天狗様は、お祓いをするので神主さんの格好をします。ガチャ面様と猿面様は、もんぺ履いて、法被みたいなもんを着ますね。ほれから、ノミとか、カナヅチ、スリコギとか、子供を脅す為の道具を持って歩いとるね。スリコギは、すりおろす道具でね。食器の道具。まめに仕事をしなさいよ、細かい作業もきちんとしなさいよ、っちゅうことでスリコギは持っとるの。あと、猿面様はお供えしてあった餅を集めながら回る。やから、猿面様は餅入れる為の袋を持っとるげん。

「アマメ様ござった。餅３つでーとけや」

アマメ様がうちを訪問する時に周りのもんがはやす「アマメ様ござった。餅３つでーとけや」っていう歌の意味は「アマメ様ござった」は、アマメ様が来て下さいましたということでね。「餅３つでーとけや」っちゅうのは、お供えしたったお餅３つをアマメ様に差しだすんやぞっちゅうことを言っとるんよ。何でお餅が３つかというのはね、天狗様と、雄と雌のガチャ面様の３人分のお餅やからやよ。

ずっと続いたアマメハギ

これは、書いたもんで残る行事じゃないもんですからね。300 年前も 500 年前もあったんですよ。詳しいことは分からんね。

アマメハギといったこういう行事は、海岸線上に沿って九州から北海道まであったんよ。それもだんだん無くなっていったわ。秋田県の「なまはげ」とかもやり方はちごうけど、アマメハギとほとんど同じ意味なんですよね。

自分がおうた経験を次に……

アマメハギっちゅうのは誰にも習わないでやるんです。みんな子供の時におうたアマメハギの経験を、次は自分でお面をかぶってやるわけです。こんねすれば、怖い、っちゅうがも、分かっとりますからね。だから、アマメハギは体で覚えたまんまでやっております。どんなもんだっていうのは、体で覚えている。本質だけはみんなきちんと、アマメハギすっ時にそういう話はする。ちゃんと本質的な物だけは話繋いでおりますから。表現の仕方っていうのは多少違うかもしらんけども、同じことを言うとる。

時代とともに

多少ぐらい変化しますね。大きさぐらい。スリコギでも小さい物を大きい物に替えて持って歩いたり。ノミも前はほんとの物を持って歩いたがですけども、子供がケガすると危ないもんで、それに近いもんをこしらえて音だけ聞こえるようにして横向けて鳴らす。そういう風にしてやっております。その時代その時代に合うようにしてやっとる。

それと最近は、じいちゃんばあちゃん１人しかおらんという家庭がおおなった。だから、そういう所に行けばアマメ様の脅しを別にして、ほして「家のお祓いをしますよ」っちゅう形で今はやっております。やっぱ家庭によってね、迷惑にならないようにしないといけないし……。

それと、昔はアマメ様をやる人は成人になった人か、42の厄年の人らが厄を除けるために面をかぶっていたんですよ。それが、面をかぶる人がだんだんおらんがになったから、一時的にもうする人がおらんがになったので、はや年齢はともかく、皆月青年会っていう地元の青年会の人らちに「やってもらえんか？」ということで話をしたら、青年会の人らが「やりましょう」っちゅうことで、今現在までそういう形で続いております。昔はそういうことしませんでしたけども。でも、特別な形の変化は無いんですわ。持たにゃならんもんその物は、変わらないですね。

重要無形文化財

アマメハギが習慣的にやっていたことが、重要無形民俗文化財に登録されてありがたいことだとは思います。だけど、そうなるとこれをいつまで繋いで続けていかれるかなというのは、一番心配になります。子供がいなくなるとね、やりにくくなるし。それにもし、このアマメハギっちゅう行事が無くなってしまったら、ほんでもう、将来復活しようと思ってもおそらく復活できないと思います。

これから先のアマメハギ

人数は今んとこはまだ何とか足りてます。ほかへ行っとる人達も、正月の夜に地元へ帰ってきて、地元のじいちゃんばあちゃんらと一緒に生活をするという家庭の風習がまだ残っておりますのでね。正月なら皆さん帰っておられるので。だから、アマメハギの行事を昔の年越しで６日の晩にしとったんですよ。それを今、正月の２日の晩にすることに日にちを変えてやっとります。正月、他行っとる人も帰ってくる、そういう家庭もあります。それが楽しみでくる人もおるし、嫌がっとる方もおる。できるだけ楽しく残すようにしたいなとは思ってます。

でも、これから先は心配ですね。脅される子供がいなくなると、多分アマメ様はまず無くなって、しようと思っても面様になる人もおるかどうか、ということなると思いますわ。はや、じいちゃんばあちゃんになってから、面かぶって子供いない所を回るわけにいかんし。子供が面かぶるわけにいかんしね。

後を継いでいかにゃならんなっていう思いはあるんやけども、人がおらんさけにね。どうしようもならんわ。こればっかしは。そうなれば、部落としての活動も無くなるし、おそらくそれで部落も終わりやわね。まあ、そんねならんように何とかやりたいね。

願い　～残していく為にも～

アマメハギは後世に残していきたいですね。アマメハギを残していくためにも、まず皆さんに正月に地元に帰ってきて欲しいしね。子供がほんとにおらんがになって、歩く人もだんだんおらんがになったというかっこうになれば、自然消滅になるね。そうならんためにも何とかして帰ってきて欲しい。

名人にとってのアマメハギとは……

やっぱりね、正しい道を歩く。人としての正しい道を歩くがの礎になれば、と思います。「ああ、わりいことすれば駄目やっちゅう言われたな」っちゅうことに参考になればと思います。正しい道を歩くということは大切だからね。ルールを勉強せえとか、親の言うことを聞くとか、そういう考え方を子供のうちに持ってもらいたいと思うね。

子供達に一番にして欲しいこと

子供達には、一生懸命勉強するようになればいいな、ちゃんと親の言うことといて、うちのお手伝いをして、父ちゃん母ちゃんにきちんと奉仕できるようになればいいなと思います。後は、自分の道を自分の行きたい道を、ちゃんと知らないかんなと思いますね。「こういう所に行きたいな」というのを自分で想像して、頭に置いてどうすればいいのかということを考えながらいって欲しいですね。それは、その人その人に違いが出てくると思うけど、別に、それがまちごうとるっちゅうことは絶対無いわけや。さやけ、ちゃんとした自分の生きる道を行くための気持ちを持って欲しいと思いますね。［取材日：2014年8月8日・10月18日］

PROFILE

番場　政晴 ばんば　まさはる
昭和12年10月22日・77歳
皆月日吉神社　宮司

高校卒業後、昭和34年3月より皆月日吉神社の宮司に就任。皆月・五十洲のアマメハギ行事の継続に尽力した。その後、門前町アマメハギ保存会の会長に就任して現在に至る。

● 取材を終えての感想 ●

今回、能登の里山里海の聞き書きに参加することによりいつもは絶対できないような貴重な経験ができてとても嬉しかったです。特に、番場さんにインタビューできたのが一番印象に残っています。番場さんは、とても優しくて、詳しく話を聞かせていただきました。アマメハギのことを聞いてもっと知りたいと思ったし、番場さんのこともっと知りたいと思いました。アマメハギの話を聞くにつれて一度体験してみたいとも思いました。どんな様子なのか、その場の雰囲気を直接感じ取りたいと思いました。機会があれば、今年は忙しいから無理だけど、来年あたりに行ってみようと思いました。番場さんには、貴重なお話を聞かせていただいてとても感謝しています。（河渕理乃　写真：右）

今回、聞き書き研修から始まり、実際に名人にインタビューをして、それを書き起こし、最後には、皆が読めるように文章にして、と今までに無い体験をすることができて、とても嬉しいです。書き起こしをして、それを小見出しをつけて文章にするのが、一番しんどかったし、一番時間がかかりました。でも、その原稿ができた時の達成感、やりがいはすごくありました。このような貴重な経験を今後に活かしていきたいなと思いました。また、アマメハギのこと、名人自身のこと、たくさんの話を深く掘り下げて聞くことができました。アマメハギにすごく興味が湧いたし、是非1回直接行ってみたいなと思いました。お話しして下さった、名人の番場政晴さん、たくさんのサポートをして下さった、研修のスタッフの皆さん、ありがとうございました。（古川真菜　写真：左）